狭山市文化財報告　第21集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　12

宮ノ越遺跡 第8次調査
城ノ越遺跡 第12・13次調査

個人住宅・道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2000

狭山市教育委員会

狭山市文化財報告　第21集

狭山市埋蔵文化財調査報告書　12

宮ノ越遺跡 第8次調査
城ノ越遺跡 第12・13次調査

個人住宅・道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2000

狭山市教育委員会

2000

鹿山市教育委員会

序

狭山市を貫流する入間川流域には、先人の生活、文化を伝える埋蔵文化財が連なるように分布しています。こうした営みの跡は、古くは1万6千年前の先土器時代から近世まで、途中断続しながらも、歴史を語り継いでいます。しかし、これら貴重な埋蔵文化財も、当市が都心から40km圏内に位置するという好条件から急激に開発が増加し、破壊の危機にさらされてきました。

当市では、開発によって消え去る埋蔵文化財を記録保存するため、国庫補助事業や市単独事業として市内遺跡の発掘調査を実施してまいりました。本書で報告する城ノ越遺跡と宮ノ越遺跡は、市北部の柏原に所在する遺跡で、前者は昭和52年以降、後者は昭和53年以降連綿と調査が行われている市外でも著名な奈良・平安時代の集落跡です。今回報告の対象としたのは、平成6年度から平成7年度にかけて実施した調査で、個人住宅及び道路整備に伴って行われたものです。個々の調査面積はわずかでありますが、それぞれ奈良・平安時代の住居跡が発見され、貴重な遺物が出土しています。これらの成果が、埋蔵文化財保護に対する理解を深めるとともに、考古学研究者のみならず、市民の皆様の生涯学習に資する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査においてご理解を頂いた地権者、また献身的に調査に従事し、報告書刊行までご協力いただいた協力員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

狭山市教育委員会
教育長　野村　甚三郎

例　言

1　本書は、狭山市柏原地内所在の宮ノ越遺跡第８次調査及び城ノ越遺跡第12・13次調査の報告書である。

2　本書で報告する発掘調査は個人住宅建設及び道路整備に伴うもので、前者は国庫補助事業、後者は市単独事業として実施した。

3　発掘調査届に対する文化庁の受理番号と調査原因は、以下のとおりである。

宮ノ越遺跡 第８次調査　平成７年６月12日付、７委保記第５－217号　個人住宅建設

城ノ越遺跡 第12次調査　平成７年10月６日付、７委保記第５－2822号　道路整備

城ノ越遺跡 第13次調査　平成８年４月16日付、７委保記第５－7407号　個人住宅建設

4　発掘調査期間は、以下のとおりである。

宮ノ越遺跡 第８次調査　平成６年12月20日～平成６年12月27日

城ノ越遺跡 第12次調査　平成７年４月11日～平成７年４月24日

城ノ越遺跡 第13次調査　平成７年10月25日～平成７年11月８日

5　報告書作成は、平成11年11月１日から平成12年３月31日まで行った。

6　発掘調査は石塚和則が担当し、伊倉榮男、伊藤輝雄、久保正雄、坂入しげ子、坂入　誠、指田ツネ、田口文枝、増田富雄、山本とし子が参加した。

7　図版の作成と出土品の整理は石塚が担当し、今井綾子、小林はつみ、斉藤通子、瀬戸山真由美、高森志都、坂東昭子、増田早苗、山川淑恵の補助を受けた。

8　土師器・須恵器の、実測及びトレースは石塚香氏の協力を得た。

9　本書の執筆は石塚があたった。

10　本書の編集は狭山市教育委員会社会教育課が行い、石塚が担当した。

11　発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。厚く感謝の意を表する（敬称略）。

石塚　香、富田和夫、中平　薫、根本　靖、松本尚也、渡辺　一

埼玉県教育委員会 生涯学習部 文化財保護課、財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団、所沢市埋蔵文化財調査センター、日高市教育委員会

凡　例

1　遺構図の縮尺は住居跡1/60、同竈跡1/30、掘立柱建物跡1/60、土壙1/60、全測図1/200とし、各挿図にスケールを付した。

2　遺構平面図の方位は座標北を、遺構断面図の水糸レベルは、海抜高を示す。

3　遺構番号は、遺跡内の過去の調査で検出された遺構を含めた通し番号である。

4　遺物実測図の縮尺は、土器、石器、鉄製品いずれも1/3とし、各挿図にスケールを付した。

5　本報告書に掲載した出土品は狭山市教育委員会で保管している。

目　次

序

例言・凡例

目　　次

挿図・図版目次

I　調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査の組織 …… 2

II　遺跡の立地と環境 …… 3
　1　遺跡の概要 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3

III　宮ノ越遺跡 第8次調査 …… 7
　1　調査の経過と成果 …… 7
　2　検出遺構 …… 7
　3　出土遺物 …… 9

IV　城ノ越遺跡 第12次調査 …… 12
　1　調査の経過と成果 …… 12
　2　検出遺構 …… 12
　3　出土遺物 …… 18

V　城ノ越遺跡 第13次調査 …… 20
　1　調査の経過と成果 …… 20
　2　検出遺構 …… 20
　3　出土遺物 …… 26

VI　まとめ …… 30

《附　編》 …… 32

挿図目次

第１図　狭山市遺跡分布図……4
第２図　宮ノ越遺跡第８次調査区位置図及び調査区全測図……8
第３図　第67号住居跡……9
第４図　第67号住居跡出土遺物(1)……10
第５図　第67号住居跡出土遺物(2)……11
第６図　城ノ越遺跡第12次調査区位置図及び調査区全測図……13
第７図　第19号住居跡(1)……14
第８図　第19号住居跡(2)……15
第９図　第９号掘立柱建物跡……16
第10図　第19号住居跡出土遺物……17
第11図　城ノ越遺跡第12次調査表採遺物……19
第12図　城ノ越遺跡第13次調査区位置図及び調査区全測図……21
第13図　第20号住居跡(1)……22
第14図　第20号住居跡(2)……23
第15図　第10号掘立柱建物跡……24
第16図　第11号掘立柱建物跡・第55号土壙…25
第17図　第20号住居跡出土遺物(1)……27
第18図　第20号住居跡出土遺物(2)……28
第19図　城ノ越遺跡第13次調査表採遺物……29
第20図　城ノ越遺跡第９次調査出土遺物……30
第21図　凸帯付四耳壺表採地点……32
第22図　市内遺跡出土凸帯付四耳壺……33

図版目次

図版１　宮ノ越遺跡第67号住居跡全景
　　第67号住居跡遺物出土状況
図版２　第67号住居跡出土遺物
図版３　城ノ越遺跡第12次調査風景
　　第19号住居跡全景
図版４　第19号住居跡遺物出土状況
　　第９号掘立柱建物跡全景
図版５　第19号住居跡出土遺物
図版６　城ノ越遺跡第12次調査表採遺物
図版７　城ノ越遺跡第13次調査区全景
　　第20号住居跡調査風景
図版８　第20号住居跡全景
　　第20号住居跡遺物出土状況
図版９　第10号掘立柱建物跡全景
　　第11号掘立柱建物跡全景
図版10　第20号住居跡出土遺物(1)
図版11　第20号住居跡出土遺物(2)
図版12　第20号住居跡出土遺物(3)
　　城ノ越遺跡第９次調査出土遺物
　　鳥ノ上遺跡表採遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1　発掘調査に至る経過

狭山市教育委員会では、昭和58年度以降、国及び県の補助金を得て、民間開発及び個人住宅建設に係る埋蔵文化財確認調査、さらに後者については記録保存を目的とした発掘調査を実施している。これらの調査は通常、農業委員会事務局や開発行為に関わる部局との連絡、地権者との調整により随時行っている。なお、公共事業についても同様の調整の上、調査を実施している。

今回報告の宮ノ越遺跡第８次調査、城ノ越遺跡第12・13次調査は、個人住宅建設と道路整備事業に伴うもので、事前に確認調査の依頼を受けて試掘を行い、遺構の有無を確認している。遺構確認後は、開発者との協議の上、発掘調査を工事日程に支障をきたさないよう調整し、平成６年度及び平成７年度に国庫補助事業と市単独事業として実施した。

各調査の文化財保護法第98条の２の規定による埋蔵文化財発掘調査届に係る文化庁長官の受理通知は例言に示したとおりである。

各調査の所在地、開発者、調査面積は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	開発者	調査面積	時　代
宮ノ越遺跡第８次調査 (県遺跡番号22－016)	狭山市柏原3,657－１外	山崎富枝	166.5㎡	縄文時代 前期・中期 奈良時代 平安時代
城ノ越遺跡第12次調査 (県遺跡番号22－013)	狭山市柏原2,346－２	狭山市	66.7㎡	
城ノ越遺跡第13次調査 (県遺跡番号22－013)	狭山市柏原2,271－３	大室詳司	183㎡	

2　発掘調査の組織

1）発掘調査（平成６年度）

主 体 者	狭山市教育委員会	教 育 長	武居　富雄
	生涯学習部	部　　長	久津間利一
担 当 課	社会教育課	課　　長	牛窪　忠洋
		課長補佐	小沢　卓男
	文化財係	係　　長	石田　公一
		主　　査	伊藤　　清
		主　　任	小渕　良樹
		主　　事	石塚　和則
		主　　事	松嶌　直人
調査担当			石塚　和則

2）発掘調査（平成７年度）

主 体 者	狭山市教育委員会	教 育 長	武居　富雄
	生涯学習部	部　　長	市村　春子
担 当 課	社会教育課	課　　長	増島　長次
		課長補佐	小沢　卓男
	文化財係	係　　長	伊藤　　清
		主　　任	小渕　良樹
		主　　任	原　　肇
		主　　事	石塚　和則
調査担当			石塚　和則

3）整理・報告（平成11年度）

主 体 者	狭山市教育委員会	教 育 長	野村甚三郎
		次　　長	横田　武雄
担 当 課	社会教育課	課　　長	梅田　久詞
		主　　査	小渕　良樹
		主　　任	原　　肇
		主　　任	石塚　和則
整理担当			石塚　和則

II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の概要

宮ノ越遺跡は、狭山市柏原字宮ノ越外に所在する縄文時代前・中期及び奈良・平安時代の集落遺跡で、西武新宿線狭山市駅より直線距離にして、北へ約3.5kmに位置している。遺跡南西から北東にかけて県道狭山鯨井線が走る。現在は、県道の両側を中心に開発が進められ、遺跡のおよそ1/3が宅地化している。遺跡立地面は概ね平坦で、標高は44～48m、遺跡東南辺は入間川に向けて急崖となり、比高差は約10mを測る。昭和53・54年の埼玉県遺跡調査会の調査以来、７次に渡って発掘調査が実施され、今回報告分を含めれば奈良・平安時代の竪穴住居跡67軒、掘立柱建物跡19棟、墓跡４基が検出されている。

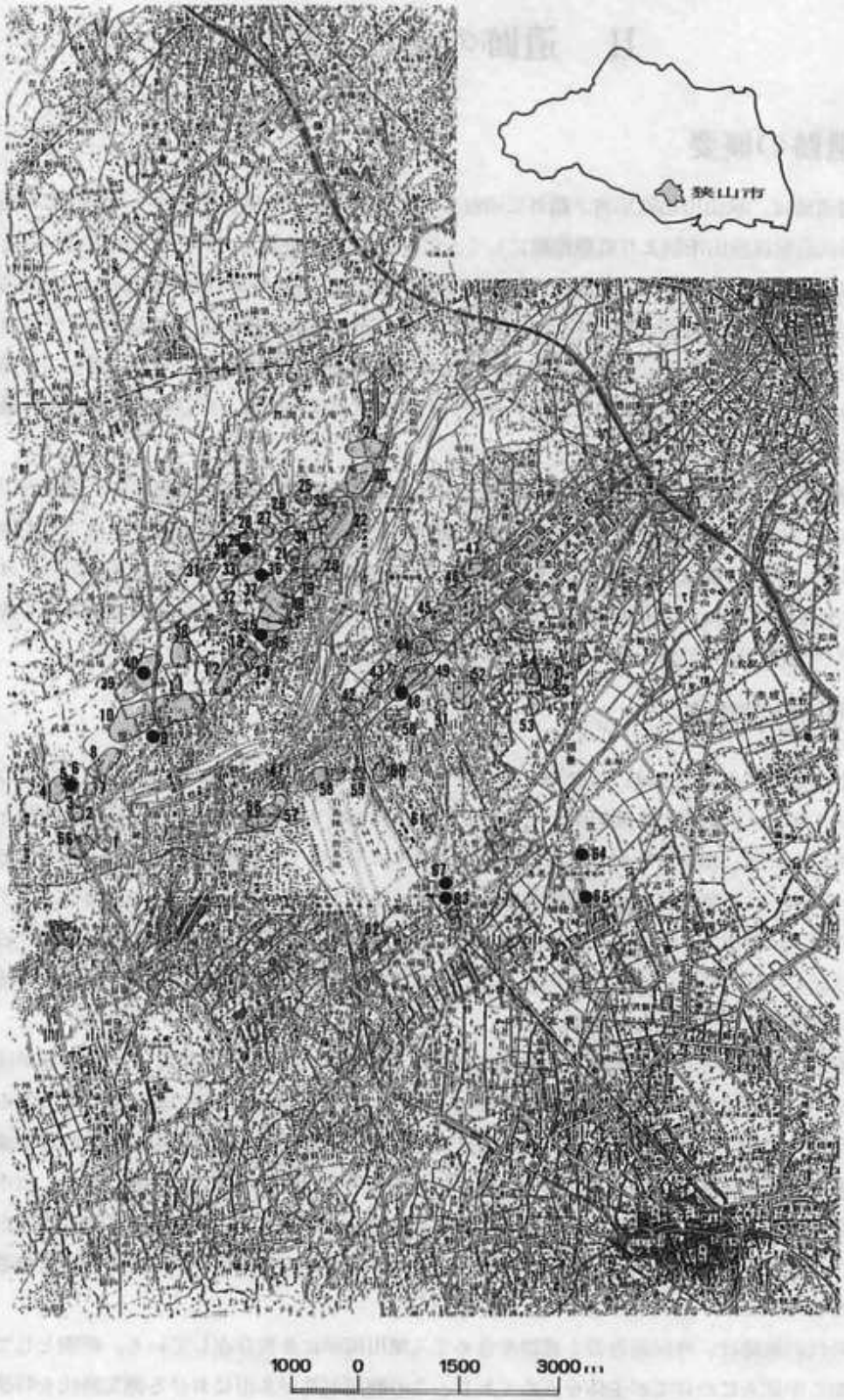
城ノ越遺跡は、宮ノ越遺跡に隣接して立地し、狭山市柏原字城ノ越外に位置する。遺跡内の標高約49～50m、遺跡南側は段丘崖で下位面との比高差は約12mを測る。県道西側は、徐々に宅地化しつつあるが、東側は農業振興区域で麦畑や野菜畑等の田園風景が広がる。平成３年度以降、ほ場整備事業が断続的に行われ、発掘調査もこれに伴って随時実施されている。17次に渡る調査で検出された竪穴住居跡は既に53軒を数え、その実態が明らかになりつつある。

2　歴史的環境

狭山市内を流れる河川には、外秩父山地の伊豆ケ岳、武川岳等に水源を発し、市域を北東方向に貫流する入間川、狭山市立入間川東小学校付近等に水源を有する久保川、現在五号幹線水路となっている智光山公園に水源をもつ小河川、さらに入間川に平行して市域南側を流れる不老川がある。昭和56・57年度に実施された市内遺跡詳細分布調査によって確認された67ヵ所の遺跡は、いずれもこれらの河川に開折された段丘・台地上に立地している。特に入間川流域には、左岸３段、右岸２段の段丘面上に39ヵ所もの遺跡が分布する。ここでは、近年の調査成果も加えて、各時代の特徴的な遺跡について言及することとする。

先土器時代の遺物としては、詳細分布調査で森の上西遺跡、上中原遺跡でナイフ形石器が採集されているが、両遺跡とも現在まで調査対象となっていないため、遺跡内容の詳細は不明である。平成２年度から平成３年度にかけて㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団が首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した西久保遺跡発掘調査において、先土器時代の石器製作跡が多数発見され、当市における当該期の一端が明かとなった。狭山市遺跡調査会でも、平成６年度に同遺跡の発掘調査を行っている。武蔵野台地第４層下部の良好な資料を得た。また、先土器時代終末の細石刃が宮地遺跡で表採されている。

縄文時代の遺跡は、今回報告の２遺跡を含めて入間川両岸に多数存在している。時期としては前期後半から中期末にかけてが主体を占めており、この時期偏差が本市における縄文時代を特徴づけている。ただし、前・中期以外の資料も近年の発掘調査によって、徐々に蓄積されつつある。



第1図　狭山市遺跡分布図

狭山市内遺跡一覧（括弧内は、県遺跡番号）

1　東八木窯跡群（22049）奈・平
2　八木遺跡（22068）縄(中)、奈・平
3　八木北遺跡（22021）奈・平
4　八木上遺跡（22022）縄(前・中)、奈・平
5　沢口上古墳群（22020）古(後)
6　笹井古墳群（22019）古(後)
7　沢口遺跡（22080）縄(早～中)、古～平
8　宮地遺跡（22018）縄(中)、奈・平
9　金井遺跡（22071）中
10　金井上遺跡（22023）縄(前)、奈・平・中
11　上広瀬上ノ原遺跡（22005）縄(草)、奈・平
12　霞ケ丘遺跡（22004）縄(中)、奈・平
13　今宿遺跡（22002）縄(早～中)、奈・平
14　上広瀬古墳群（22001）古（後）
15　森ノ上西遺跡（22079）先
16　森ノ上遺跡（22008）縄(中)、奈・平
17　富士塚遺跡（22009）縄(中)、奈・平
18　鳥ノ上遺跡（22010）奈・平
19　小山ノ上遺跡（22011）縄(中・後)、古～平
20　御所の内遺跡（22012）奈・平
21　英　遺跡（22074）中
22　**城ノ越遺跡（22013）縄(前・中)、奈・平**
23　**宮ノ越遺跡（22016）縄(前・中)、奈・平**
24　字尻遺跡（22075）縄(前～後)、奈・平
25　丸山遺跡（22037）縄(前・中)、奈・平
26　金井林遺跡（22035）縄(中・後)
27　鶴田遺跡（22044）縄(前・中)
28　上の原東遺跡（22065）奈・平
29　上の原西遺跡（22063）縄(中)
30　半貫山遺跡（22061）中
31　稲荷山遺跡（22058）縄(後)
32　前山遺跡（22059）縄(中)
33　高根遺跡（22062）縄(中・後)
34　町久保遺跡（22034）縄(中)、奈・平
35　宮原遺跡（22017）縄(前～後)
36　下双木遺跡（22078）縄(草)
37　上双木遺跡（22077）縄(中・後)、奈・平
38　上広瀬西久保遺跡（22073）奈・平
39　西久保遺跡（22069）先、奈・平
40　東久保遺跡（22070）先
41　上諏訪遺跡（22086）縄(中・後)、奈・平
42　滝祇園遺跡（22066）縄(前・後)、古～平
43　峰　遺跡（22024）縄(中・後)、奈・平
44　戸張遺跡（22026）縄(前・中)、奈・平
45　揚櫨木遺跡（22027）縄(前・中)、奈・平
46　坂上遺跡（22029）縄(中)、奈・平
47　稲荷上遺跡（22032）縄(前・中)、奈・平
48　上中原遺跡（22025）先
49　中原遺跡（22025）縄(早～後)、奈・平
50　沢台遺跡（22079）縄(中)、奈・平
51　沢久保遺跡（22041）縄(中)
52　下向沢遺跡（22042）縄(中・後)、奈・平
53　吉原遺跡（22067）縄(前)
54　下向遺跡（22085）縄(前～後)
55　台　遺跡（22084）縄(前～後)
56　稲荷山公園古墳群（22052）古(後)
57　稲荷山公園遺跡（22051）縄(中)
58　石無坂遺跡（22083）縄(中)、奈・平
59　富士見西遺跡（22082）縄(中)、奈・平
60　富士見北遺跡（22072）縄(前・中)、奈・平
61　富士見南遺跡（22081）縄(中)
62　町屋道遺跡（22088）縄(前～後)、奈・平
63　七曲井（22046）中
64　堀兼之井（22047）中
65　八軒家の井（22076）中
66　八木前遺跡（22087）縄(前・後)
67　堀雛井遺跡（22089）中

草創期については、上広瀬上ノ原遺跡、滝祇園遺跡で両面加工尖頭器、西久保遺跡、下双木遺跡で有舌尖頭器が出土しているが、検討材料が極めて少ない。

早期では、平成５年度に実施した柏原所在の高根遺跡発掘調査において、押型文土器の小破片が出土している。また、同年度に実施した今宿遺跡発掘調査で早期後半の野島・茅山式期のファイヤーピットが検出され、数個体の土器が復元可能と思われる。

前期では、黒浜式期の集落跡が上奥富所在の揚櫨木遺跡や笹井所在の八木上遺跡で検出されており、この時期になってようやく狭山市内の縄文集落の様相が明確となってくる。また、平成７年度調査の稲荷上遺跡からも黒浜期の住居跡とともにまとまった資料が出土している。後続する諸磯期以降の遺跡としては遺物包含層が検出された笹井の金井上遺跡、八木前遺跡があるが、近年八木上遺跡で前期終末の土器群と住居跡の検出があり注目されている（栗岡 1995　金子 1996）。

中期には遺跡数が大幅に増加し、発掘調査は実施していないが、表面採集から当該期の遺跡と考えられるものを含めると37遺跡を数える。最も著名な遺跡としては、笹井に位置する宮地遺跡があげられる。現在までに５回にわたって調査が実施され、縄文中期の住居跡が68軒検出され、その分布状況から双環状集落跡の存在が想定される。他に、柏原の丸山遺跡において勝坂期末から加曽利ＥⅠ期に継続する比較的小規模の集落跡が調査されている。中期末では、字尻遺跡、揚櫨木遺跡、宮地遺跡で柄鏡形住居跡がそれぞれ検出されている。

後期の遺跡は16遺跡を数えるが、発掘調査が実施されたのは入間川左岸、柏原所在の高根遺跡のみで中期終末から後期堀之内式期に継続する単独埋甕、土壙・ピット群が検出されている。なお、宮原遺跡では加曽利Ｂ式が、隣接する城ノ越遺跡で安行Ⅱ式の土器片が表採されおり、本調査における出土が待たれる。縄文時代晩期から弥生時代にかけては、本市は遺跡空白となっており、現在まで当該期の遺跡は確認されていない。

古墳時代の遺跡としては、笹井上古墳群、笹井古墳群、上広瀬古墳群、稲荷山公園古墳群がある。調査が実施されたのは笹井古墳群と上広瀬古墳群で、７世紀後半のものと考えられる。ただし、笹井古墳群は石室の構造が特異であるため、古墳時代以降の墳墓のである可能性も否定できない。当該時代の集落遺跡としては滝祇園遺跡が上げられる。昭和56年度に調査が実施され、古墳時代後期の竪穴住居跡１軒が検出されている（小渕他 1983）。

奈良・平安時代の遺跡は、入間川両岸に帯状に連続して形成される。本市付近は、入間郡と高麗郡の境と考えられ、特に左岸は市北東より今回報告の宮の越遺跡、城ノ越遺跡の両遺跡、御所の内遺跡、小山ノ上遺跡、若干距離をおいて今宿遺跡、宮地遺跡と当該期の遺跡が濃密に分布しており、位置的・時期的に相互関連が十分に考えられる。これらの遺跡の対岸に立地する大規模な該期集落遺跡としては、前述した上奥富に所在する揚櫨木遺跡がある。

中世の遺跡としては、鎌倉街道上道と主要支道である堀兼道が市域を貫いているおり、一部には道路状の切り通しが残存している。また、この路線に沿って「まいまいず井戸」と呼称される七曲井や堀兼井などの井戸跡が点在する。入間川左岸では、平成５年度に調査を行った柏原所在の小山ノ上遺跡で、幅６ｍ、深さ2.8ｍを測る大規模な堀跡が検出された。隣接する中世の鋳造遺跡と推定される英遺跡でも同様の堀跡が発見され、15世紀末の内耳鍋が出土している。

Ⅲ　宮ノ越遺跡第8次調査

1　調査の経過と成果

調査は個人住宅建設に伴うもので、原因者から埋蔵文化財確認調査依頼書が提出された。これを受けて、市教育委員会直営で確認調査を平成6年10月26日に実施、遺構を確認した。

本調査は、確認調査の結果を受けて、平成6年12月20日から平成6年12月27日にかけて実施した。調査経過は以下のとおりである。

平成6年度

10月26日(水)　確認調査。奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒を検出。遺構周辺の表土を除去。

12月20日(火)　遺構確認作業。竈は調査区外。セクションベルトを設定し、掘り下げを開始する。一部、床面に至る。

12月22日(木)　床面まで掘り下げ終了。セクション図作成。遺構を清掃して、写真撮影を行う。

12月26日(月)　遺構平面図、調査区全測図作成。

12月27日(火)　機材撤収。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒のみである（第2図）。なお、遺構番号は昭和53・54年の第1次調査からの通し番号で、第67号住居跡となる。

2　検出遺構

住居跡

第67号住居跡（第3図）

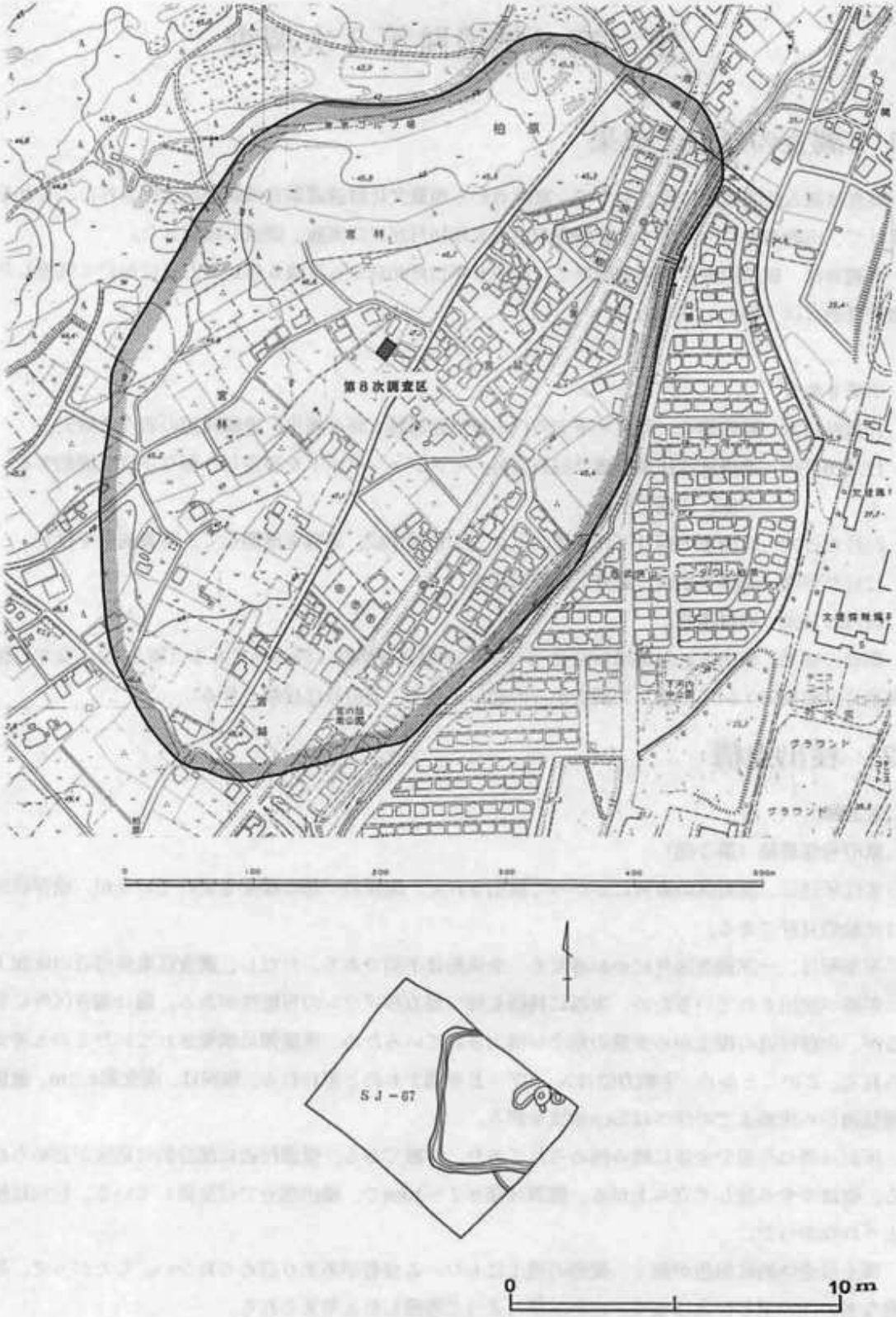
本住居跡は、調査区の東角にかかって検出された。床面の一部に攪乱を受けているが、遺存状態は比較的良好である。

平面形は、一部調査区外にかかるため、全体形は不明である。ただし、調査区東角付近の床面上に炉跡が検出されているため、東西に長径を持つ長方形プランの可能性がある。竈は調査区外に有るが、炉跡付近の覆土から少量の粘土が検出されているため、東壁側に構築されていたものと考えられる。このことから、主軸方位はN－92°－Eを指すものと思われる。規模は、南北辺4.3m、遺構確認面から床面までの深さは25cm前後を測る。

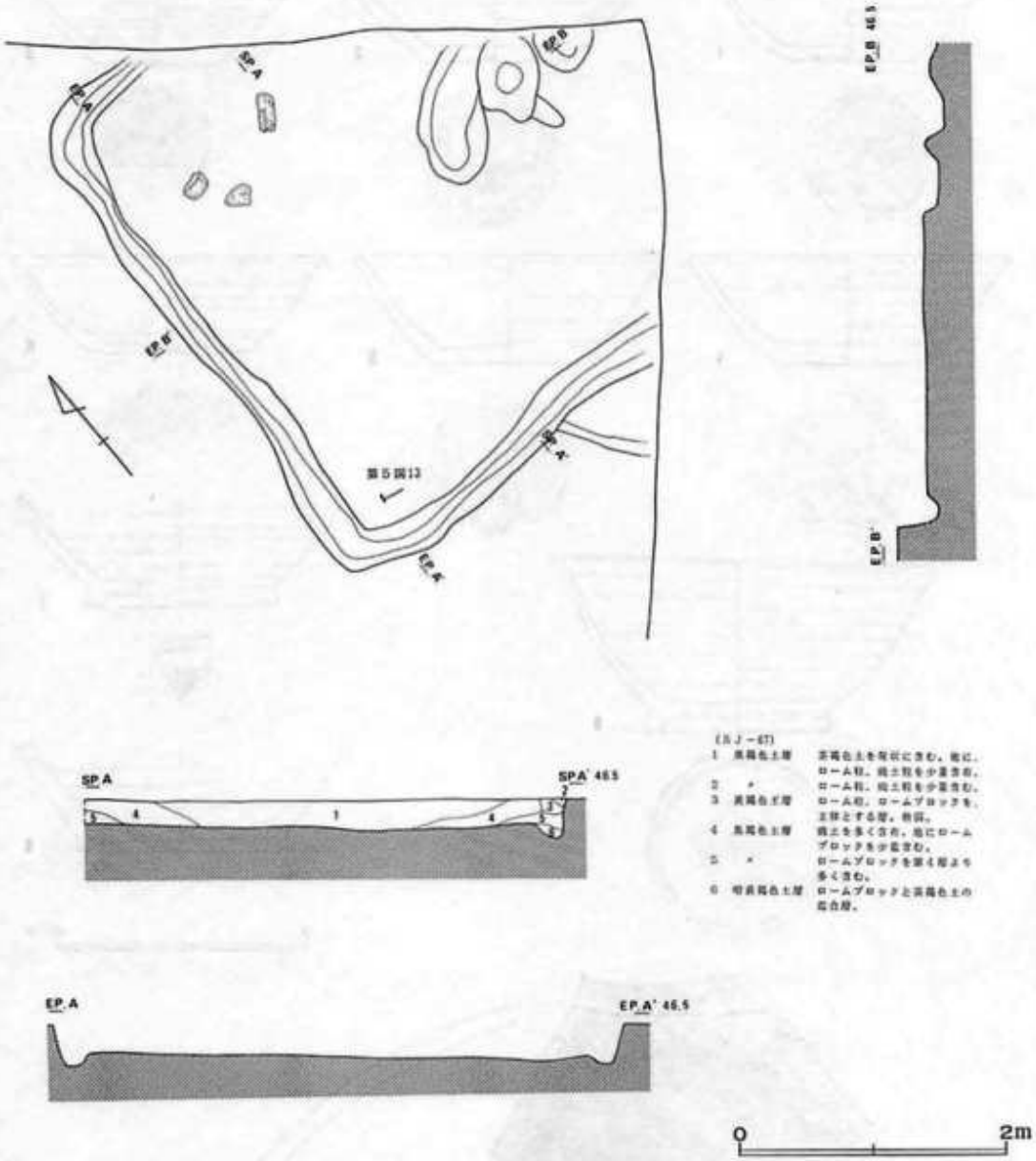
床面は概ね平坦で全体に踏み固められており、堅緻である。壁溝付近に部分的に貼床が認められる。壁はやや外反して立ち上がる。壁溝は深さ7～10cmで、検出部分では全周している。柱穴は検出されなかった。

覆土は全体的に黒色が強く、壁際の覆土にもローム含有があまり認められない。したがって、周堤などの埋め戻し行為はなく、自然堆積によって埋没したと考えられる。

出土遺物には、須恵器坏、椀、甕、瓶、土師器甕、鉄製紡垂車があり、比較的少ない。



第２図　宮ノ越遺跡第８次調査区位置図及び全測図



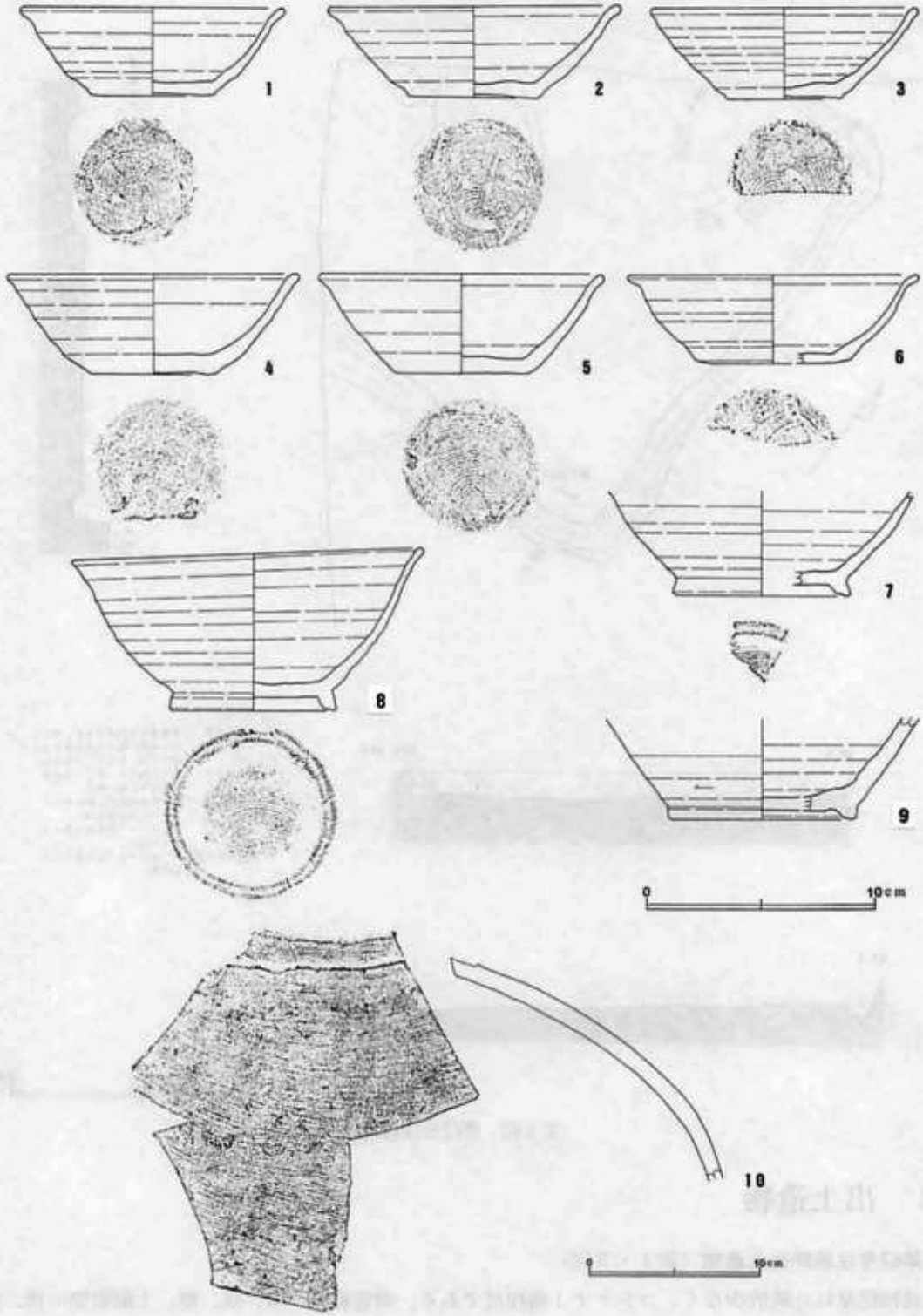
第３図　第67号住居跡

3　出土遺物

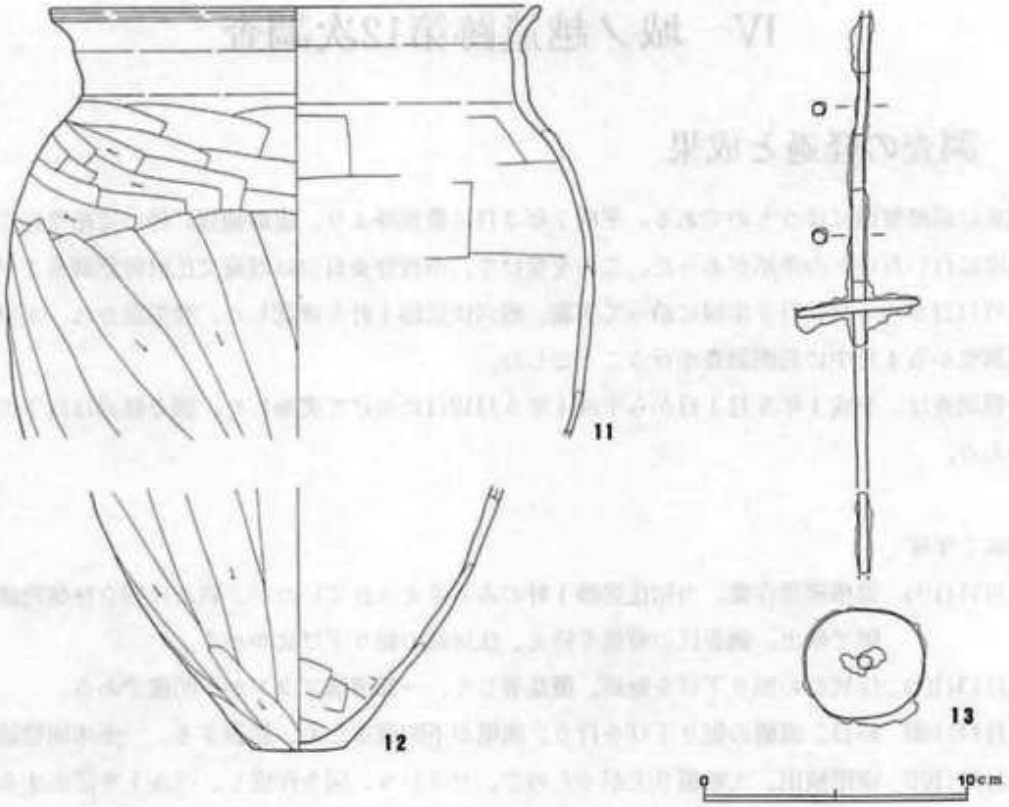
第67号住居跡出土遺物（第４・５図）

遺物総量は比較的少なく、コンテナ１箱程度である。須恵器坏、椀、瓶、甕、土師器甕の他、鉄製紡垂車がある。

第４図１～６は、須恵器坏である。いずれも覆土中の、中位から上位にかけて出土している。底部は回転糸切り。６のみ南比企産で、他は東金子産である。法量は口径が推定も含めて、11～13cm、



第4図　第67号住居跡出土遺物(1)



第５図　第67号住居跡出土遺物(2)

底径が４～６cmに収る。器形は、３～５は直線的に開く器形が特徴的でいずれも肉厚である。１・２・６は口唇部が外反するが、６が最も顕著である。７・８の椀はいずれも高台椀で、底部中央に糸切り痕を残す。10は甕で大型の破片が数点出土しているが、いずれも接合しなかった。第５図11・12は、土師器甕で同一個体と思われる。13は鉄製紡垂車で、住居跡南西コーナーの床面直上で出土した。現存する部分で長さ推定21.3cm、円盤部の直径4.6cmを測る。

第67号住居跡遺物観察表　　（単位：cm）

No	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器坏	11.7	4.1	5.5	白色粒子・細砂	良好	灰色	口唇部歪み、外反。内面に降灰顕著。器壁、やや薄手。	80%
2	〃 坏	13.0	4.2	5.8	白色粒子	やや不良	灰白色・灰色	器壁厚手。煤の付着顕著。	70%
3	〃 坏	(11.7)	(5.0)	4.1	白色粒子・細砂	良好	褐色	外面に火襷。口縁部は直線的に外反	30%
4	〃 坏	(13.0)	5.8	4.5	白色粒子・細砂	不良	淡褐色・灰白色	器壁厚く、重量感あり。磨耗、顕著。	40%
5	〃 坏	12.7	5.9	4.5	長石・白色粒子	やや不良	明褐色・灰褐色	器壁厚く、重量感あり。口唇部、やや外反。	80%
6	〃 坏	(12.8)	6.8	4.0	白色針状物質	良好	灰褐色	器壁、薄手。口唇部、外反。	20%
7	〃 椀	—	(7.6)	(4.7)	白色粒子・細砂	良好	灰褐色	高台椀。器壁、やや薄手。	15%
8	〃 椀	15.6	7.3	7.3	長石・白色粒子	やや不良	暗黄褐色	高台椀。高台の接合痕がやや目立つ。	70%
9	〃 瓶	—	(8.0)	(4.6)	白色粒子・細砂	良好	淡褐色	底部付近の一部が残存。台部、裏面の調整が粗い。	25%
10	〃 甕	—	—	—	白色粒子・細砂	良好	灰色	表面には平行の叩き目、内面には無文の当具痕を残す。	—
11	土師器甕	19.1	—	(16.8)	石英・白色粒子	良好	赤褐色・暗褐色	12と同一個体。器壁、やや厚手。	40%
12	〃 甕	—	(3.6)	(10.3)	石英・白色粒子	良好	赤褐色・暗褐色	11と同一個体。	30%

Ⅳ　城ノ越遺跡第12次調査

1　調査の経過と成果

調査は道路整備に伴うものである。平成７年３月に農務課より、崖線補強に伴い道路整備を平成７年度に行いたいとの連絡があった。これを受けて、市教育委員会は埋蔵文化財確認調査を平成７年３月14日から３月16日を崖線に沿って実施、竪穴住居跡１軒を確認した。発掘調査は、工事日程との調整から４月中に発掘調査を行うこととした。

発掘調査は、平成４年５月１日から平成４年５月12日にかけて実施した。調査経過は以下のとおりである。

平成７年度

４月11日(火)　遺構確認作業。当初住居跡１軒のみと考えられていたが、新たに掘立柱建物跡を崖際で検出。調査区の整備を終え、住居跡の掘り下げにかかる。

４月13日(木)　住居跡の掘り下げを継続。攪乱著しく、一部遺構プランが不明確である。

４月14日(金)　終日、遺構の掘り下げを行う。南壁が不明確なため、拡張する。一部床面確認。

４月17日(月)　南壁検出。大略掘り上がったので、セクション図を作成し、ベルトを除去する。並行して、掘立柱建物跡の柱穴、掘り下げ。

４月18日(火)　住居跡の壁溝、掘り下げ。清掃して、遺構の写真撮影。

４月19日(水)　平面図作成、終了。遺物取り上げ。

４月20日(木)　竈調査。断面図作成。

４月21日(金)　竈を清掃して写真撮影。図面作成準備。

４月24日(月)　竈平面図作成、終了。機材撤収。現場作業終了。

調査の結果、検出された遺構は奈良・平安時代の竪穴住居跡１軒と掘立柱建物跡１棟である（第６図）。なお、遺構番号は昭和52年実施の第１次調査からの通し番号で、第19号住居跡と第９号掘立柱建物跡とした。

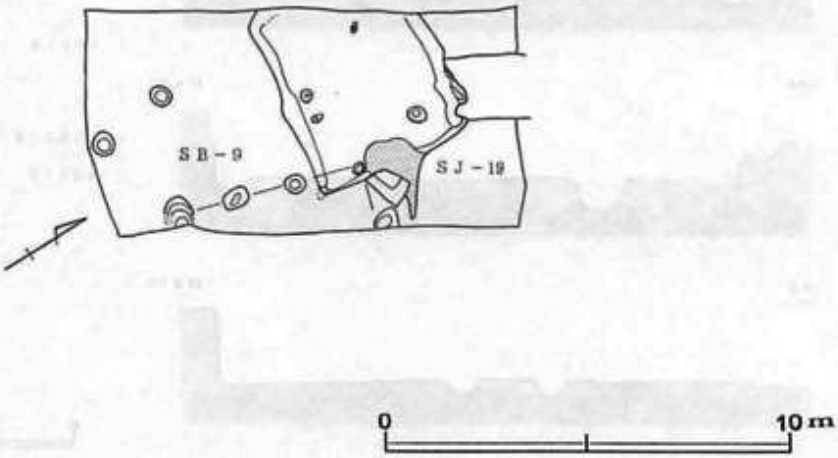
2　検出遺構

住居跡

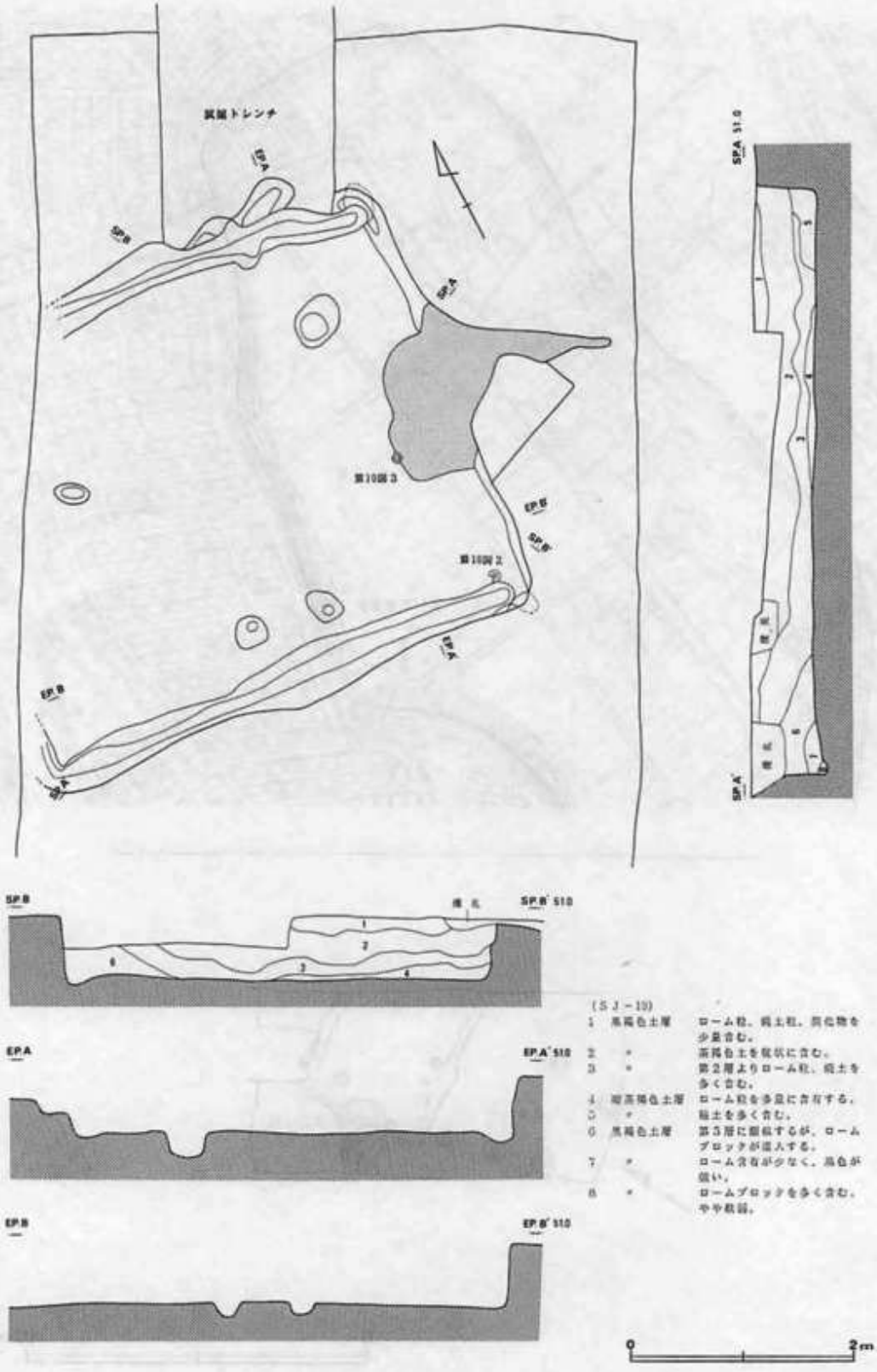
第19号住居跡（第７・８図）

本住居跡は、調査対象区中央やや北よりで検出され、遺存状態は壁中位から床面までは比較的良好である。なお、遺構の西壁及び北西コーナー部分は調査区外にある。

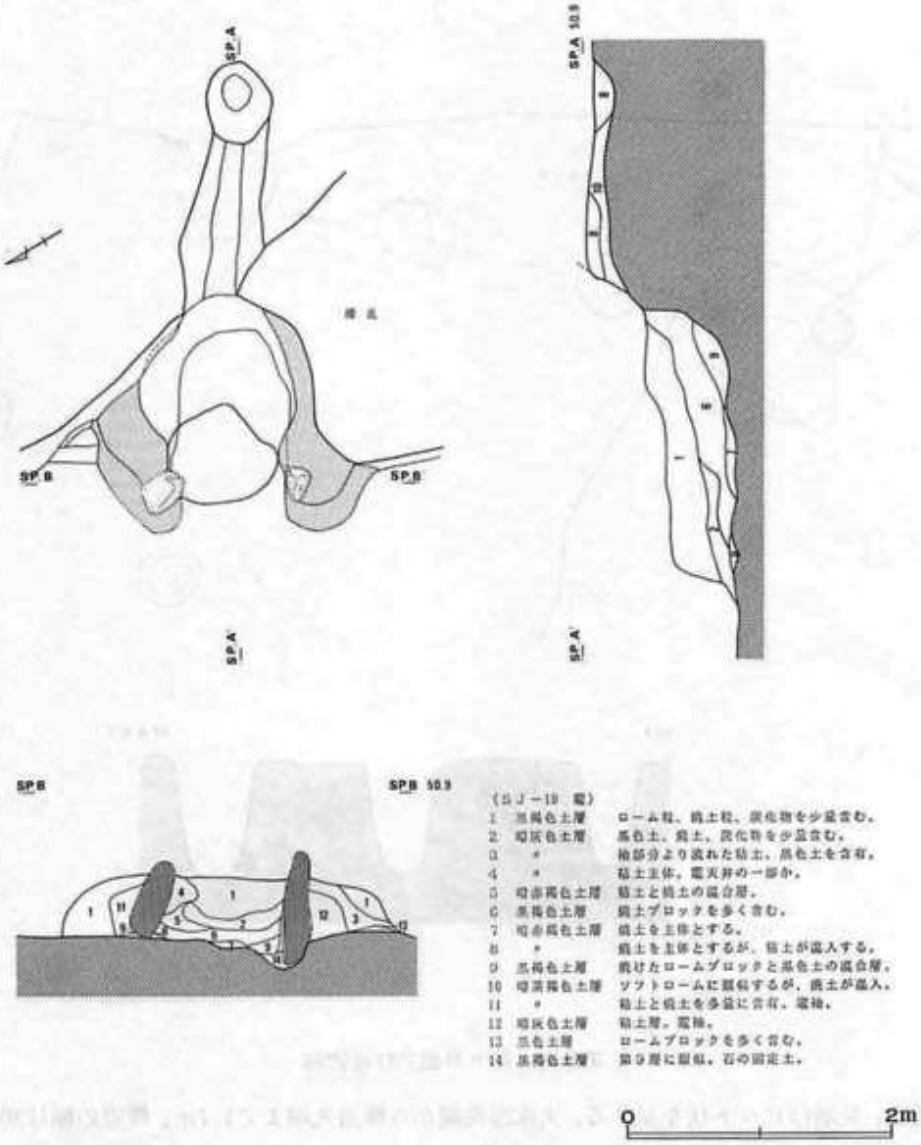
平面形は、東西に長軸を有する長方形プランを呈している。竈は東壁に位置し、主軸方位はＮ－92°－Ｅを示す。規模は、東西辺4.9m、南北辺4.1m、遺構確認面から床面までの深さは55～60cm前後を測る。覆土は大略８層に分れる。特徴的なのは第２層で、黒褐色土に茶褐色土がブロック状に



第6図　城ノ越遺跡第12次調査区位置図及び全測図



第7図　第19号住居跡(1)

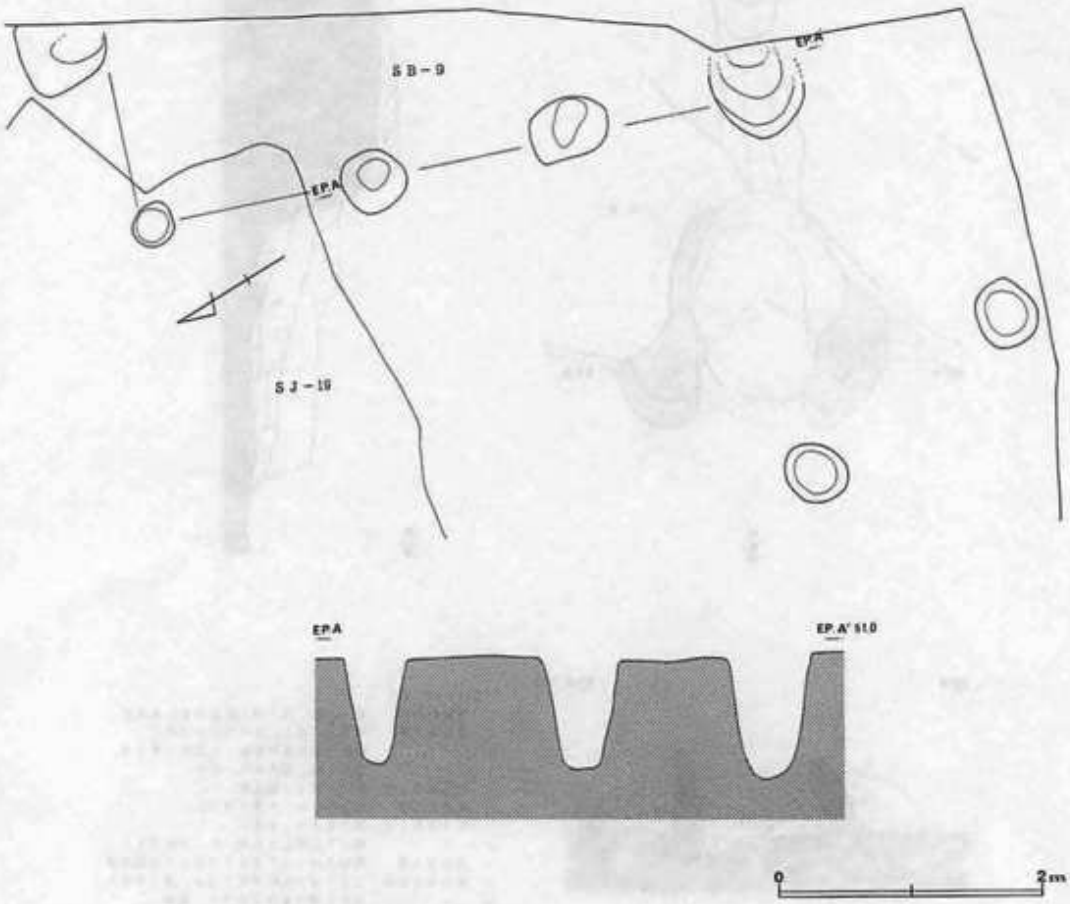


第８図　第19号住居跡(2)

混入する。覆土上位に均一的に分布する層で、遺物包含量も多かった。

床面は平坦で全体に踏み固められており、壁溝際を除けば堅緻であった。ピットは５ヵ所検出されたが、竈脇のものは第９号掘立柱建物跡の柱穴であり、他も深さ10～25cm程度で、柱穴とは言い難い。ただし、南壁に近接する２ヵ所は入口に関わる施設の可能性がある。壁溝は、西壁が調査区外にあるため断定できないが、竈が位置する東壁以外には存在するものと考えられる。特異な施設としては、北東と南東のコーナーに壁を抉るようにして掘られたピットがある。方向としては遺構の中央方向を指すよう掘られている。上屋に関わる施設かどうかは不明であるが、東壁に壁溝が伴わないこととの関連が想定される。

竈は、東壁ほぼ中央に構築されている。上部は攪乱を受けており、全体形はやや不明確である。



第9図　第9号掘立柱建物跡

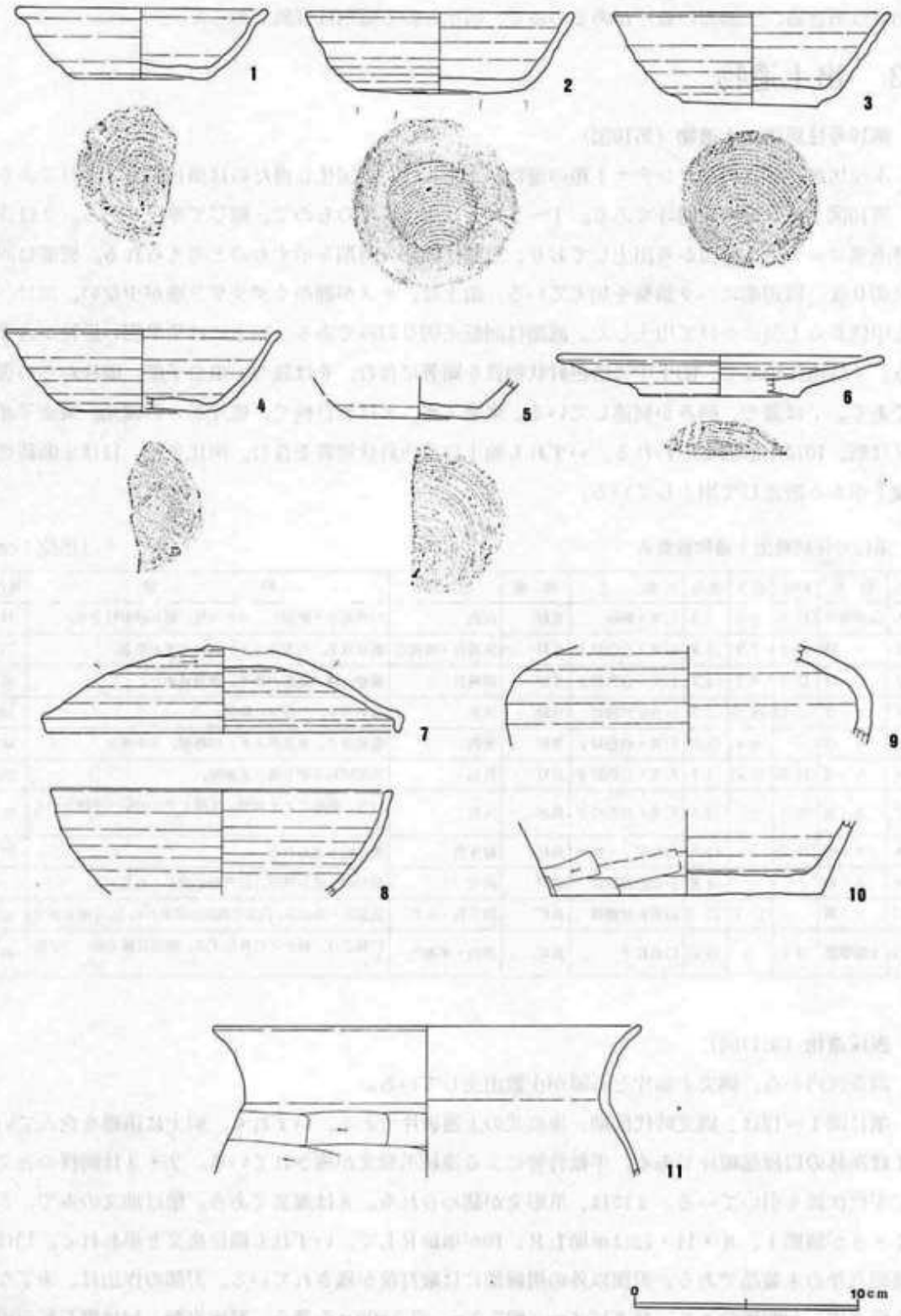
煙道が長く、先端はピット状を呈する。火床部先端から煙道先端まで1.7m、煙道の幅は30cm前後を測る。袖部には補強材として河原石が使用されていた。周囲は灰白色の粘土と黄褐色土で覆う。補強材の間隔は50cm。内部はよく焼けており、火床底部は硬化してした。なお、竈内から出土した遺物は須恵器、土師器の小破片のみで、復元できたものはなかった。

掘立柱建物跡

第9号掘立柱建物跡（第9図）

本遺構は、調査区中央の崖線よりで検出された。北西角の柱穴が、第19号住居跡に重複する。第19号住居跡調査中は確認できなかったが、柱穴底が同住居跡の床面を穿っており、さらに貼床も確認されなかったことから、本掘立柱建物跡が住居跡より後出するものと思われる。

検出された柱穴は、西側の4ヵ所と北側の1ヵ所のみで東側は不明であるが、配置状況から南北に長軸を有する2×3間の建物である可能性が高い。長軸の主軸方位は、N－15°－Eと指す。



第10図　第19号住居跡出土遺物

柱穴は、いずれも大略円形プランを呈する。規模は径50～70cm、深さは80～95cmを測る。出土遺物には須恵器、土師器の破片があるのみで、図示し得る遺物は皆無であった。

3　出土遺物

第19号住居跡出土遺物（第10図）

本住居跡からは総量コンテナ１箱の遺物が出土したが、図化し得たのは第10図のとおりである。

第10図１～５は須恵器坏である。１～３・５は東金子産のもので、総じて厚手である。２は住居跡南東コーナーの床面から出土しており、当該住居跡の時期を示すものと考えられる。底部は回転糸切り後、周辺部にヘラ調整を加えている。胎土は、キメが細かくザラザラ感が少ない。他は、覆土中位から上位にかけて出土した。底部は回転糸切りのみである。胎土にはやや粗い砂粒が含まれる。４は南比企産で、胎土中に白色針状物質を顕著に含む。６は皿で、東金子産。破片からの復元である。７は蓋で、摘みが剝落している。東金子産。８は無台椀で、破片からの復元。東金子産。９は瓶、10は小形壺と思われる。いずれも胎土に白色針状物質を含む。南比企産。11は土師器甕で、覆土中から散乱して出土している。

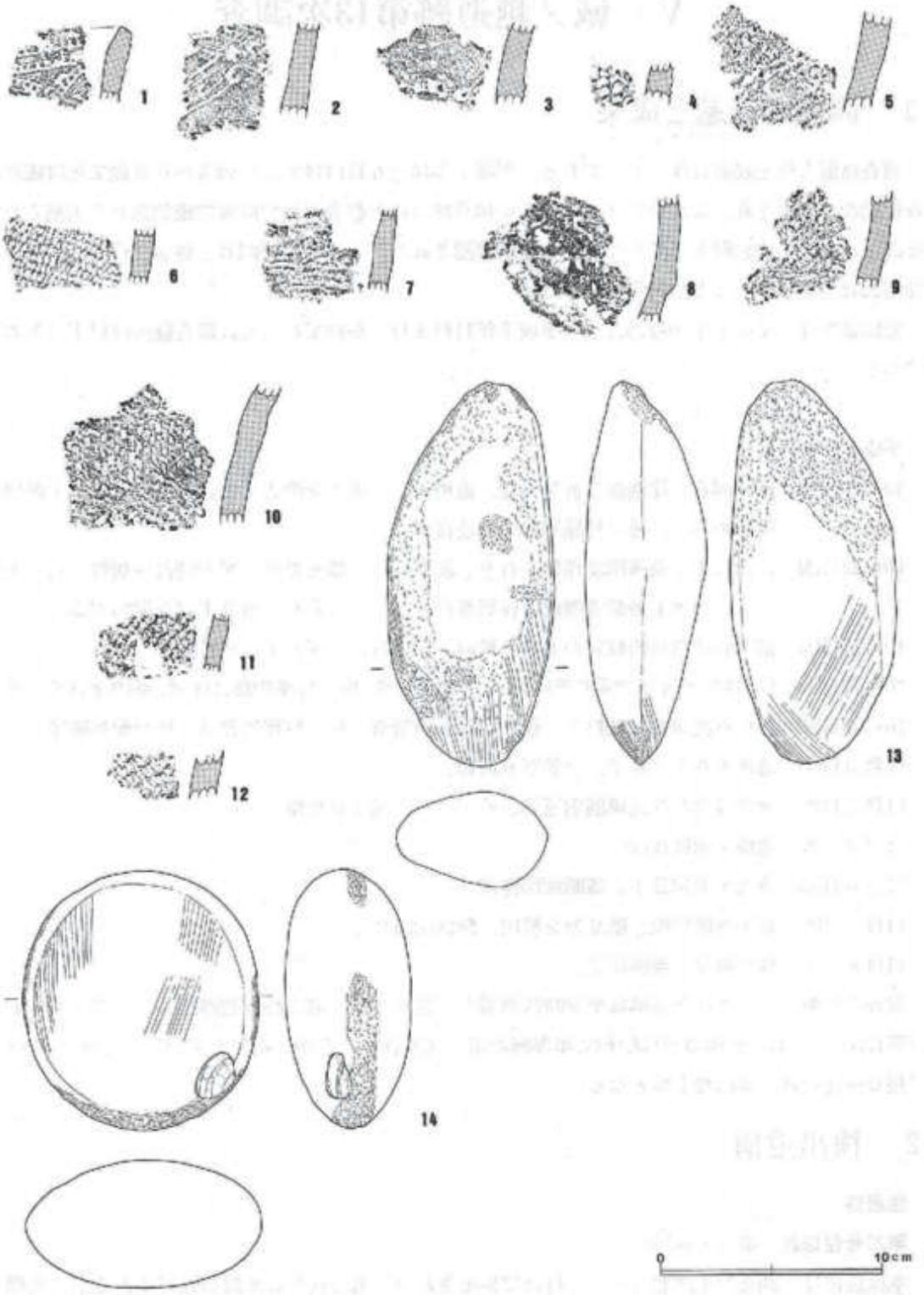
第19号住居跡出土遺物観察表　　（単位：cm）

No.	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器坏	(11.4)	6.0	3.3	石英・粗砂	良好	灰色	口唇部若干肥厚し、やや外反。粗い砂が目立つ。	35%
2	〃　坏	12.3	7.9	3.8	石英・白色粒子	良好	灰褐色・暗褐色	器壁厚手。内面に「＋」状の火襷が顕著。	75%
3	〃　坏	12.6	6.2	4.4	石英・白色粒子	良好	暗褐色	器壁、特に底部が厚手。重量感あり。	80%
4	〃　坏	(12.6)	(6.6)	3.7	白色針状物質	良好	灰色	器壁薄手。口唇部に降灰。	55%
5	〃　坏	—	6.4	(1.9)	石英・白色粒子	良好	灰色	器壁厚く、重量感あり。口唇部、やや外反。	80%
6	〃　皿	(14.6)	(7.4)	1.9	石英・白色粒子	良好	灰色	底部回転糸切り後、未調整。	20%
7	〃　蓋	16.3	—	(4.0)	石英・白色粒子	良好	灰色	摘み、剝離により欠損。体部上半に回転ヘラ削りが入る。	85%
8	〃　椀	(16.2)	—	(4.9)	白色粒子・細砂	良好	暗灰色	無台椀と思われる。	20%
9	〃　瓶	—	—	(4.6)	白色針状物質	良好	灰色	肩部の一部が残存。自然釉が認められる。	—
10	〃　壺	—	(12.5)	(3.4)	白色針状物質	良好	暗灰色・灰色	底部の一部のみ。内面に降灰が認められる。小形壺か？	35%
11	土師器甕	(19.8)	—	(6.3)	白色粒子	良好	褐色・黒褐色	口縁部は、緩やかに外反する。頸部に横方向のヘラ削り。	40%

表採遺物（第11図）

調査区内から、縄文土器片と石器が少数出土している。

第11図１～12は、縄文時代前期、黒浜式の土器破片である。いずれも、胎土に繊維を含んでいる。１は深鉢の口縁部破片である。半截竹管による連続爪形文が施されている。２・３は同様の施文具で平行沈線を引いている。４には、爪形文が認められる。８は無文である。他は地文のみで、５・７・９が無節Ｌ、６・11・12は単節ＬＲ、10が単節ＲＬで、いずれも横位施文と思われる。13は、磨製石斧の未製品である。刃部以外の周縁部には敲打痕が残されている。刃部の作出は、未了ながら研ぎ出しが明確である。長さ17.6cm、幅7.7cm、重さ996ｇを測る。凝灰岩製。14は磨石転用の敲石である。敲打は部分的に見られる。径12cm、厚さ5.8cm、重さ1,050ｇで砂岩製。



第11図　城ノ越遺跡第12次調査表採遺物

V　城ノ越遺跡第13次調査

1　調査の経過と成果

調査は個人住宅建設に伴うものである。平成７年10月６日付けで、原因者から埋蔵文化財確認調査依頼書が提出され、これを受けて平成７年10月16日に市教育委員会直営で確認調査を実施した。その結果、竪穴住居跡を１軒とピット多数が確認された。その後、原因者と協議を行い、10月中に発掘調査を実施することで同意に達した。

発掘調査は、平成７年10月25日から平成７年11月８日にかけて行った。調査経過は以下のとおりである。

平成７年度

10月16日(月)　確認調査。住居跡１軒を確認。遺構周辺の表土を除去する。周辺にはピットが数ヵ所認められ、掘立柱建物跡の可能性がある。

10月25日(水)　人力による遺構確認作業を行う。調査区の一部を拡張。平安時代住居跡１軒、土壙１基、ピット多数を確認。住居跡のベルトを設定し、掘り下げを開始する。

10月26日(木)　掘立柱建物跡の柱穴の並びを検討。住居跡は、掘り下げ継続。

10月27日(金)　住居跡は床面まで掘り下げ終了。断面図作成。掘立柱建物跡は柱穴の掘り下げを始める。

10月30日(月)　基準点測量及び杭打ち。住居跡は床面精査。掘立柱建物跡は２棟が配列確定。

10月31日(火)　遺構掘り下げ終了。全景写真撮影。

11月１日(水)　全景写真及び遺構個別写真、終了。平面図作成準備。

11月２日(木)　遺構平面図作成。

11月６日(月)　遺構平面図終了。竈断面図作成。

11月７日(火)　竈平面図作成。掘り方を検出。断面図付け足し。

11月８日(水)　機材撤収。現場終了。

調査の結果、検出された遺構は平安時代の竪穴住居跡１軒、掘立柱建物跡２棟、土壙１基である（第12図）。なお、遺構番号は昭和52年実施の第１次調査からの通し番号で第20号住居跡、第10・11号掘立柱建物跡、第55号土壙となる。

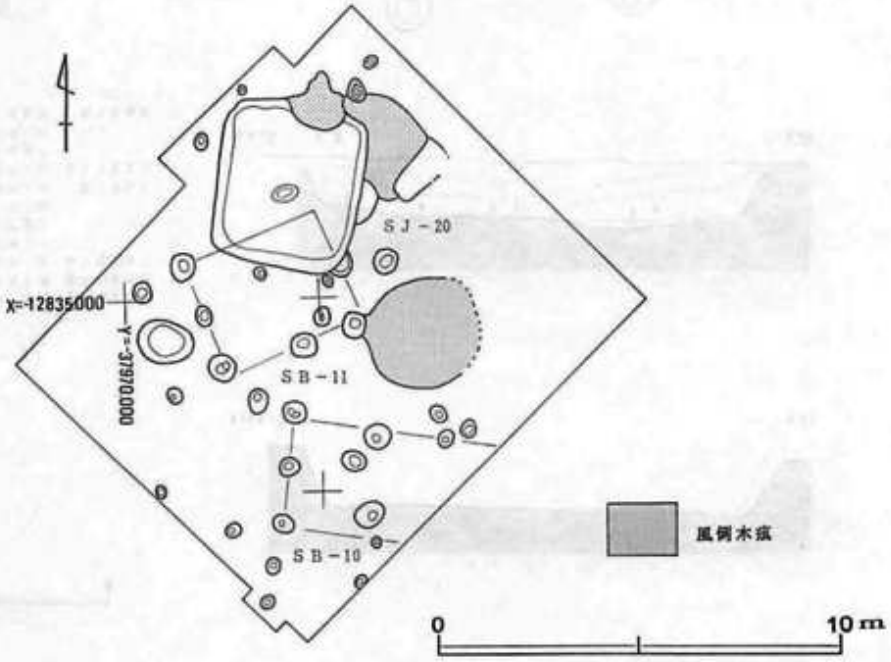
2　検出遺構

住居跡

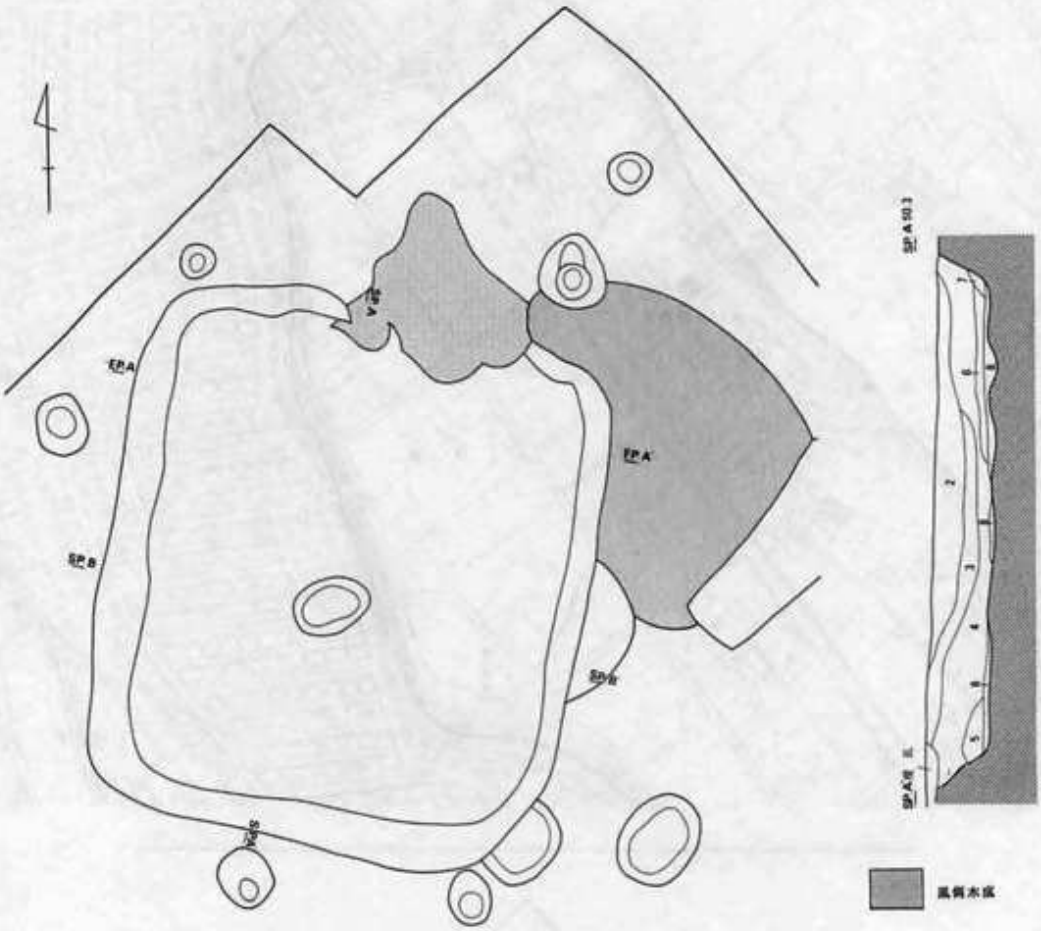
第20号住居跡（第13・14図）

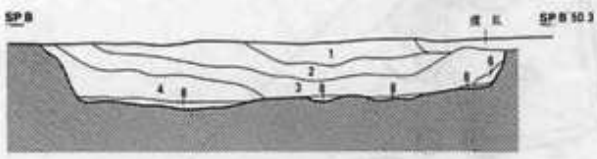
本住居跡は、調査対象区北コーナー付近で検出された。遺存状態は比較的良好であるが、風倒木痕と第11号掘立柱建物跡が重複する。

平面形は、南北にやや長い隅丸方形を呈している。主軸方位は、N－6°－Eを示す。規模は南北



第12図　城ノ越遺跡第13次調査区位置図及び全測図



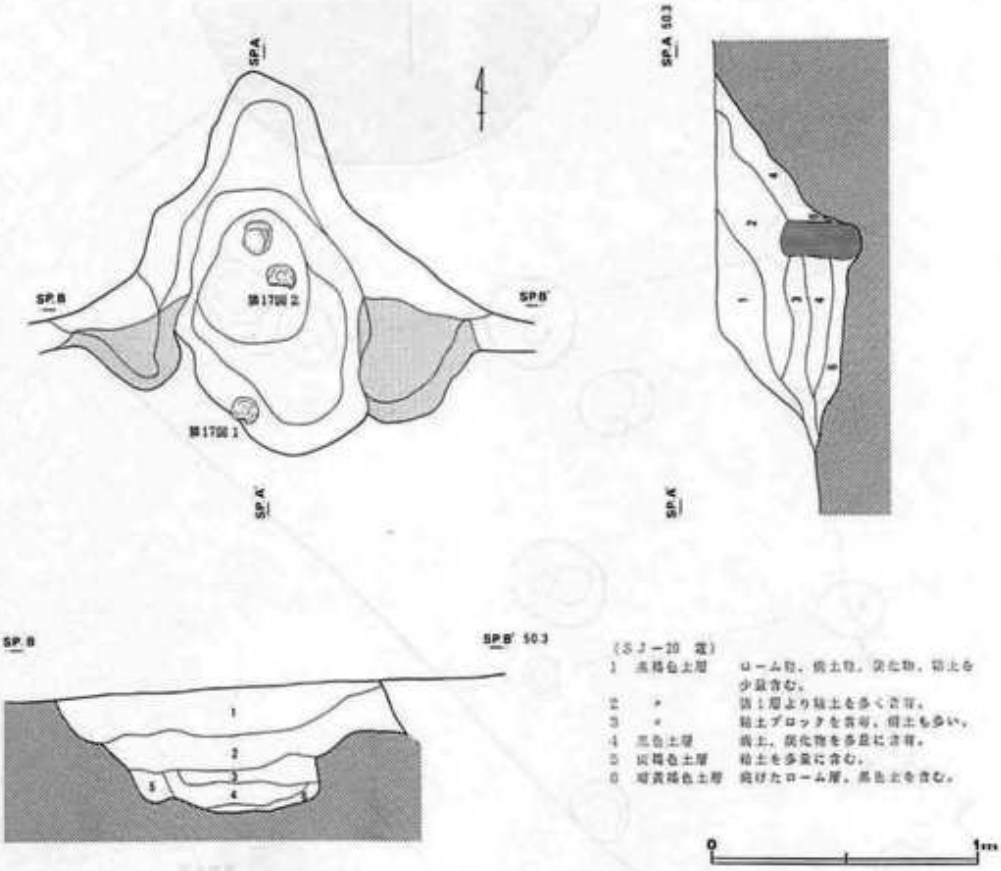


(SJ－20)

1	黒褐色土層	茶褐色土を斑状に含む。他に、ローム粒、焼土粒、炭化物を少量含有。
2	暗茶褐色土層	ローム粒を多く含む。
3	黒褐色土層	ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物を多く含む。
4	〃	上層より焼土を多く含有。
5	〃	ロームブロックを多く含む。
6	暗黄褐色土層	壁の崩落ロームを主体とする。
7	暗灰褐色土層	粘土を主体とする。
8	暗黄褐色土層	底面。黒色土とロームの混合層。

0 2m

第13図　第20号住居跡(1)



第14図　第20号住居跡(2)

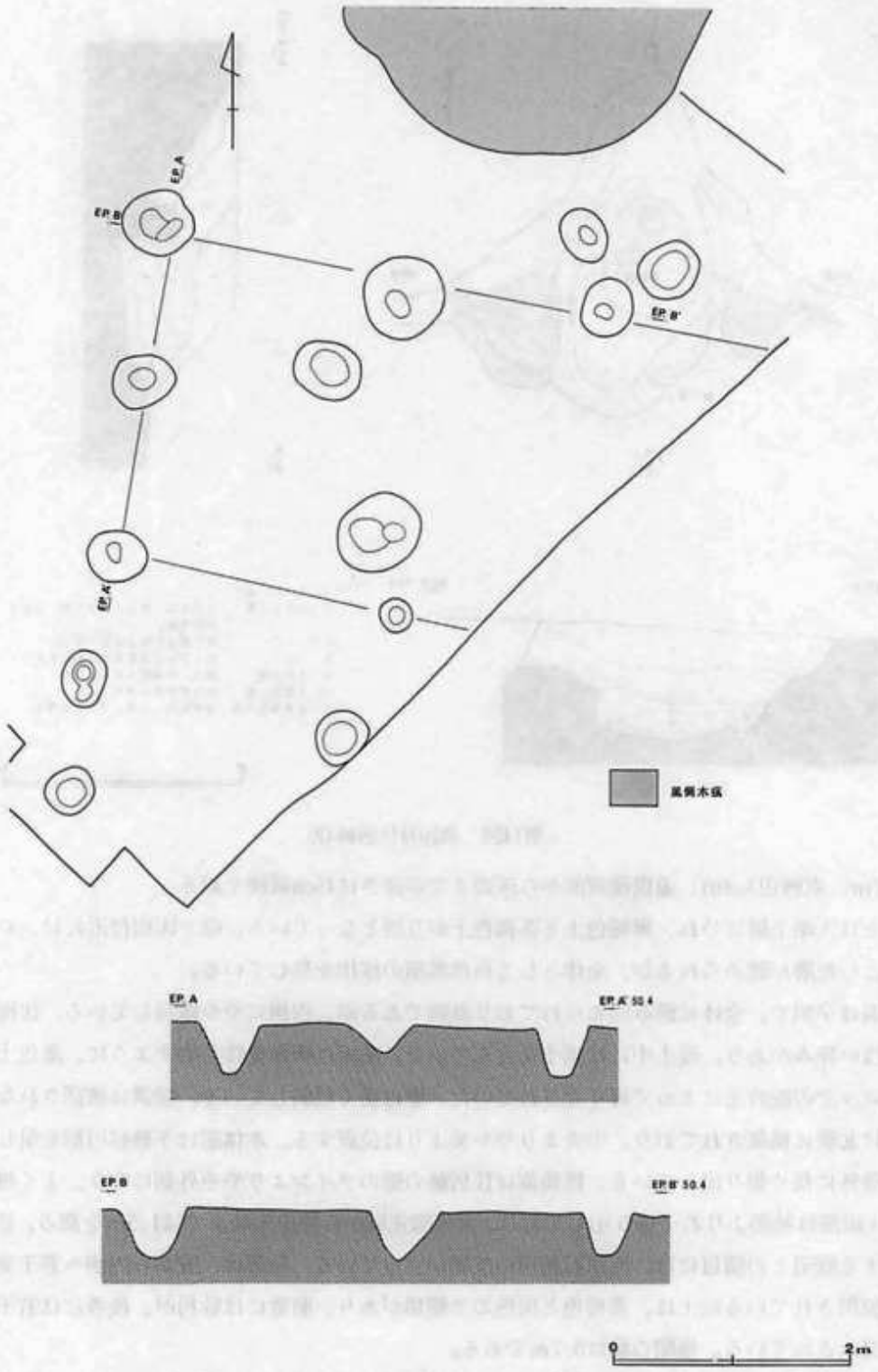
辺4.2m、東西辺3.8m、遺構確認面から床面までの深さは45cm前後を測る。

覆土は大略７層に分れ、黒褐色土と茶褐色土が互層となっている。壁と床面付近には、ロームを主体とした層が認められるが、全体として自然堆積の様相を呈している。

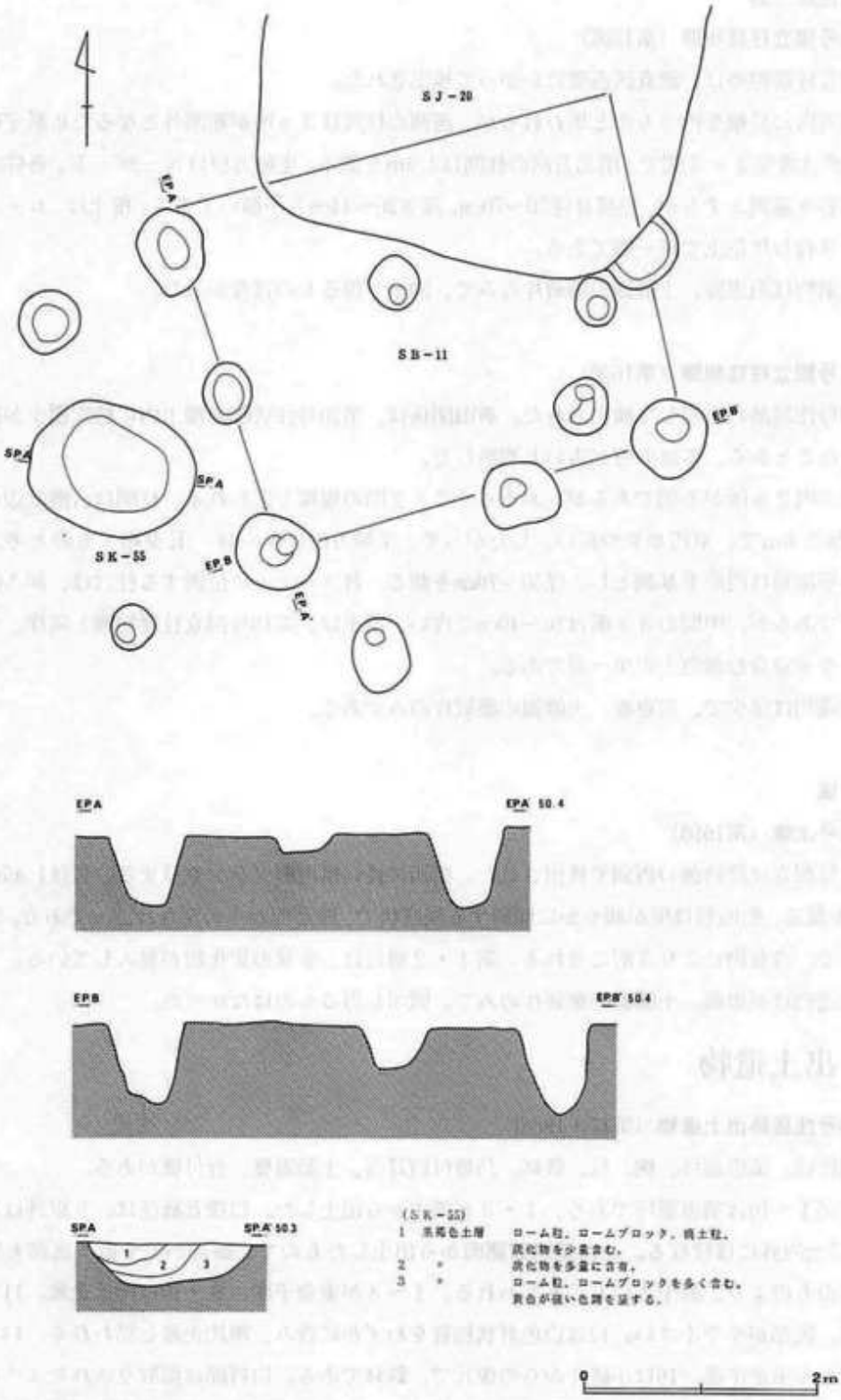
床面は平坦で、全体に踏み固められており堅緻であるが、西側にやや傾斜している。床面中央部には浅い窪みがあり、覆土中には焼土を含んでいた。貼床は床面全体を均すように、黒色土とロームブロックの混合土によって薄くなされていた。壁は緩く傾斜している。壁溝は確認されなかった。

竈は北壁に構築されており、中央よりやや東よりに位置する。本体部は不整楕円形を呈し、煙道部は壁外に長く張り出している。燃焼部は住居跡の壁のラインよりやや外側に在り、よく焼けていた。火床部は袖部より若干張り出しており、火床部先端から煙道先端までは1.5mを測る。急角度で傾斜する煙道との境目には、河原石利用の支脚が立っている。袖部は、壁から内側へ若干突出する。袖に使用されている粘土は、黄褐色と灰色の２種類があり、前者には砂利が、後者には若干の黒色土が混入されている。袖間の幅は0.7mである。

出土遺物は豊富で、須恵器の坏、椀、皿、土師器甕の他、鉄鉢と凸帯四耳壺といった希少品が出土している。



第15図　第10号掘立柱建物跡



第16図　第11号掘立柱建物跡・第55号土壙

掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡（第15図）

本掘立柱建物跡は、調査区西壁にかかって検出された。

東西方向に長軸を持つものと思われるが、西側の柱穴は3ヵ所が範囲外となるため断定はできない。規模は推定2×3間で、南北方向の柱間は2.9mを測る。主軸方位はN－98°－E。各柱穴の平面形は円形を基調とするが、規模は径30～70cm、深さ26～44cmと不揃いである。覆土は、ロームブロックを少量含む黒色土で単一層である。

出土遺物は須恵器、土師器の細破片のみで、図示し得るものはなかった。

第11号掘立柱建物跡（第16図）

第20号住居跡に重複して検出された。新旧関係は、第20号住居跡の覆土内に柱穴覆土が確認されなかったことから、本跡の方が古いと判断した。

柱穴の内2ヵ所が不明であるが、おそらく2×2間の規模と思われる。柱間は、南北辺が2.8m、東西辺が3.6mで、東西がやや長い。したがって、主軸方位はN－68°－Eを指すものと考えられる。柱穴の平面形は円形を基調とし、径50～70cmを測る。各コーナーに位置する柱穴は、深さ60～75cmと良好であるが、中間の3ヵ所は20～40cmで浅い。覆土は、第10号掘立柱建物跡と同様、ロームブロックを少量含む黒色土の単一層である。

出土遺物は僅少で、須恵器、土師器の細破片のみである。

土　壙

第55号土壙（第16図）

第11号掘立柱建物跡の西側で検出された。東西に長い楕円形プランを呈する。長径1.45m、短径1.1mを測る。断面形は壁が緩やかに傾斜する鍋底状で、確認面からの深さは38cmである。覆土は黒褐色土で、含有物により3層に分れる。第1・2層には、多量の炭化物が混入している。

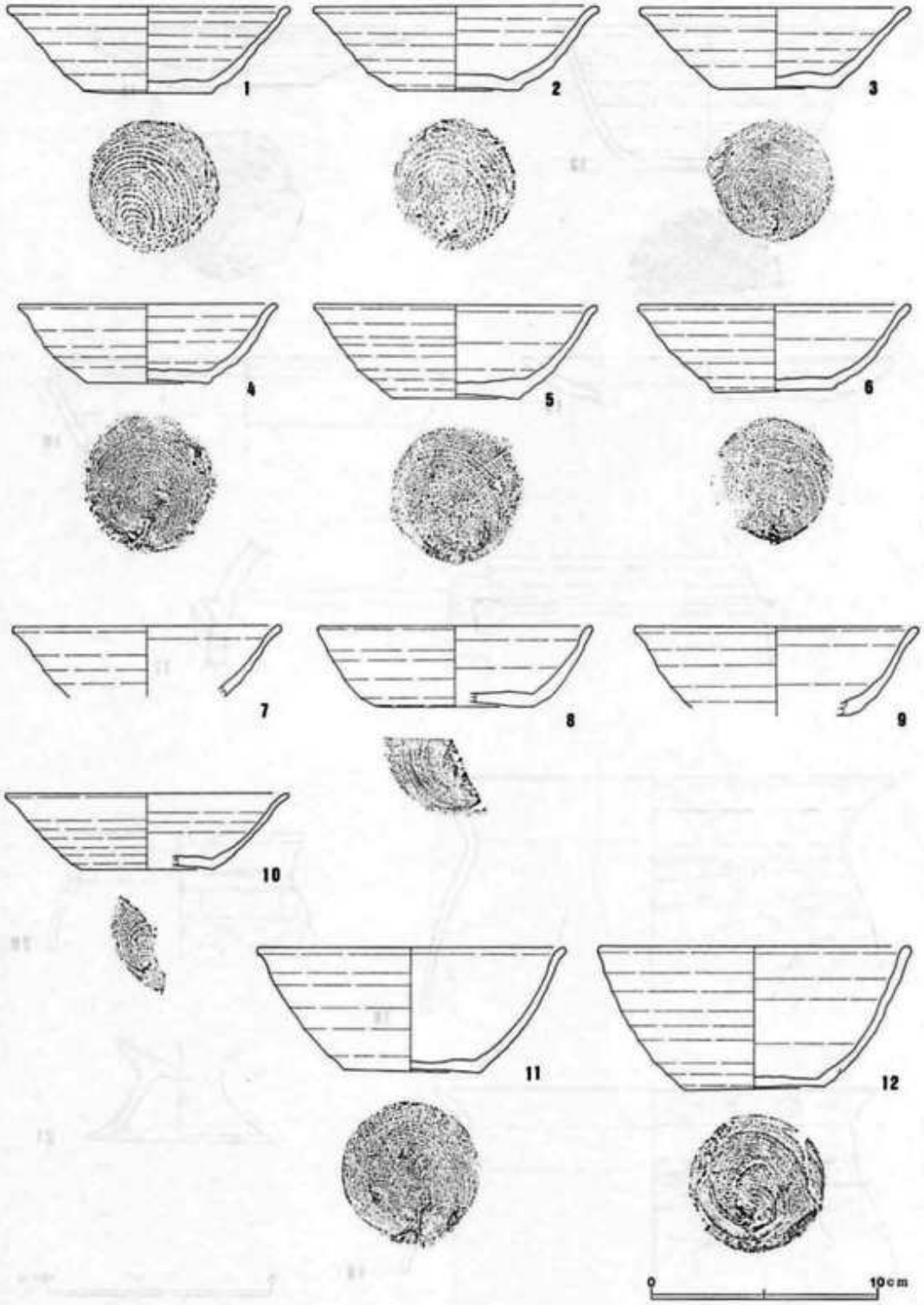
出土遺物は須恵器、土師器の細破片のみで、図示し得るものはなかった。

3　出土遺物

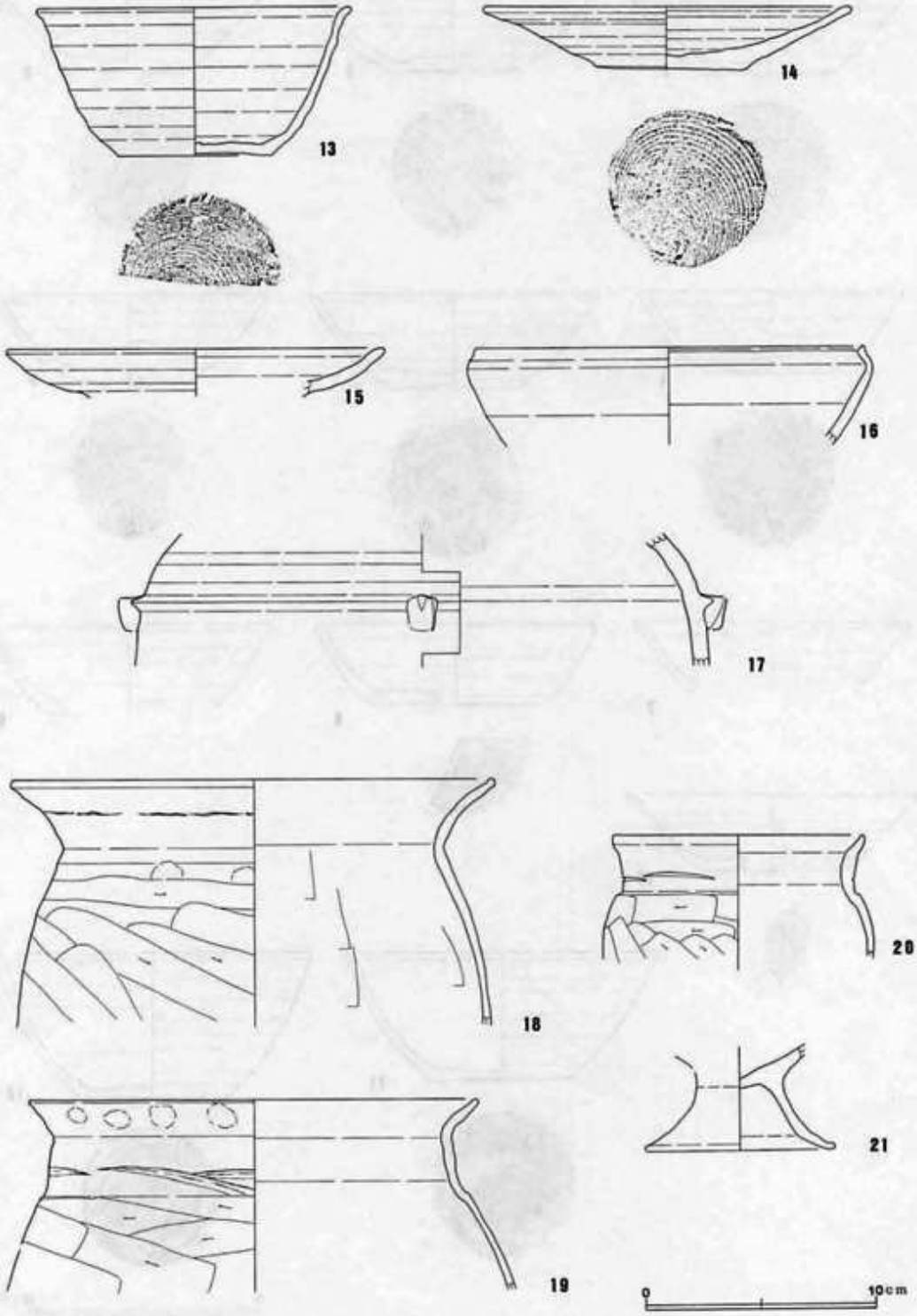
第20号住居跡出土遺物（第17・18図）

器種には、須恵器坏、椀、皿、鉄鉢、凸帯付四耳壺、土師器甕、台付甕がある。

第17図1～10は須恵器坏である。1・2が竈内から出土した。口径と底径は、8以外は12.0cm内外、5.7cm内外にほぼ収る。8は遺構確認面から出土したもので、器高がやや低く底部も径が大きい。他のものより、若干古いものと思われる。1～8が東金子産、9・10は南比企産。11～13は椀である。底部がやや小さい。12は白色針状物質をわずかに含み、南比企産と思われる。14・15の皿はいずれも東金子産。16は小破片からの復元で、鉄鉢である。口唇部は面取りされたように、平坦になっている。17は凸帯付四耳壺で、やはり小破片からの復元である。凸帯は稜が顕著で、耳は1ヵ所残存する。18～21は土師器である。18・19は甕の上半部で、口縁部の形状が異なる。



第17図　第20号住居跡出土遺物(1)



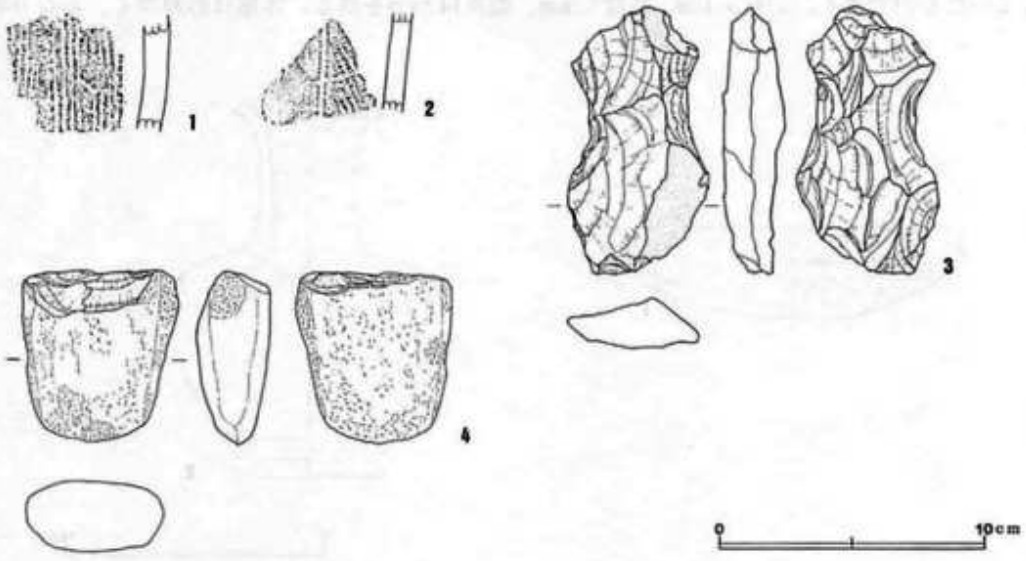
第18図　第18号住居跡出土遺物(2)

第20号住居跡出土遺物観察表　　（単位：cm）

No.	器種	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	特徴	残存率
1	須恵器坏	12.6	5.9	3.9	白色粒子・細砂	良好	橙褐色・暗褐色	竈内出土。器壁薄く、直線的に外反する器形を呈する。	100%
2	〃 坏	12.8	5.6	3.9	白色粒子・粗砂	良好	暗褐色・褐色	竈内出土。体部中位で若干内湾した後、口唇部が外反。	85%
3	〃 坏	11.9	5.7	3.7	白色粒子・石英	良好	灰褐色	直線的に立ち上がる器形。底部内面中央に指頭痕あり。	80%
4	〃 坏	11.6	5.4	3.6	白色粒子	良好	灰褐色	体部中位で若干内湾、口唇部はわずかに外反する。	75%
5	〃 坏	(12.8)	5.9	4.2	白色粒子	良好	灰色	直線的に外反する。底部厚手で重量感あり。	45%
6	〃 坏	12.0	5.5	3.9	白色粒子・粗砂	良好	灰褐色	口唇部外反。器壁やや薄手。	95%
7	〃 坏	(12.0)	—	(3.2)	白色粒子・細砂	良好	灰色	口唇部外反。器壁やや薄手。	40%
8	〃 坏	(12.4)	(7.2)	3.7	白色粒子	良好	灰褐色	胎土きめ細かく、滑らかな感じ。他のものより古手。	25%
9	〃 坏	12.6	—	4.0	白色針状物質	良好	明灰色・灰色	白色針状物質を顕著に含む。	75%
10	〃 坏	(12.7)	(6.0)	3.4	白色針状物質	良好	明灰色	器壁が非常に薄い。白色針状物質の含有量は少ない。	20%
11	〃 椀	13.9	6.2	5.7	白色粒子・石英	良好	暗灰色・褐色	口唇部やや外反。底部はやや小さめ。	75%
12	〃 椀	12.8	6.2	6.5	白色針状物質	良好	灰色	中位まで若干内湾し、口唇部は直線的に立ち上がる。	75%
13	〃 椀	13.7	6.8	6.5	白色粒子	やや不良	明灰色	体部は直線的に立ち上がり、口唇部は外反する。	30%
14	〃 皿	16.1	6.7	2.8	白色粒子・石英	良好	灰色	口縁部やや歪む。	75%
15	〃 皿	16.4	—	(2.1)	白色粒子	不良	黄灰色	口唇部やや内湾。器壁厚手。	60%
16	〃 鉢	(17.0)	—	(4.4)	白色粒子	良好	灰色	口唇部は内傾し、平坦に成形されている。破片からの復元。	—
17	〃 壺	—	—	(5.8)	白色粒子	良好	灰色	肩部に降灰。耳部分が割れている。破片からの復元実測。	—
18	土師器甕	(21.0)	—	(10.8)	白色粒子・雲母	良好	赤褐色。褐色	口縁部は直線的に外反。頸部一部未調整部分を残す。	—
19	〃 甕	19.6	—	(8.4)	白色粒子・雲母	良好	暗褐色	口縁部は「コ」字状。頸部には調整痕を明瞭に残す。	—
20	〃台付甕	(11.0)	—	(5.4)	白色粒子	良好	暗褐色・黒褐色	口縁部は直立気味でやや厚手。	—
21	〃台付甕	—	8.0	(4.6)	白色粒子	良好	暗褐色	脚部のみ。内面の調整は丁寧になされている。	—

表採遺物（第19図）

1は深鉢胴部破片で条線を地文とする。2は区画の一部に単節ＬＲの充填縄文を施す。3は打製石斧で、完形。長さ10.4cm、幅5.5cm、厚さ2.4cmを測る。表面に一部自然面を残し、周縁部には調整剥離を施している。頁岩製。4は磨製石斧の未製品である。製作中に破損したものと思われる。現存長6.8cm、幅6.2cm、厚さ2.8cm。全面に敲打痕を顕著に残す。凝灰岩製。



第19図　城ノ越遺跡第13次調査表採遺物

Ⅵ まとめ

縄文時代の城ノ越遺跡について

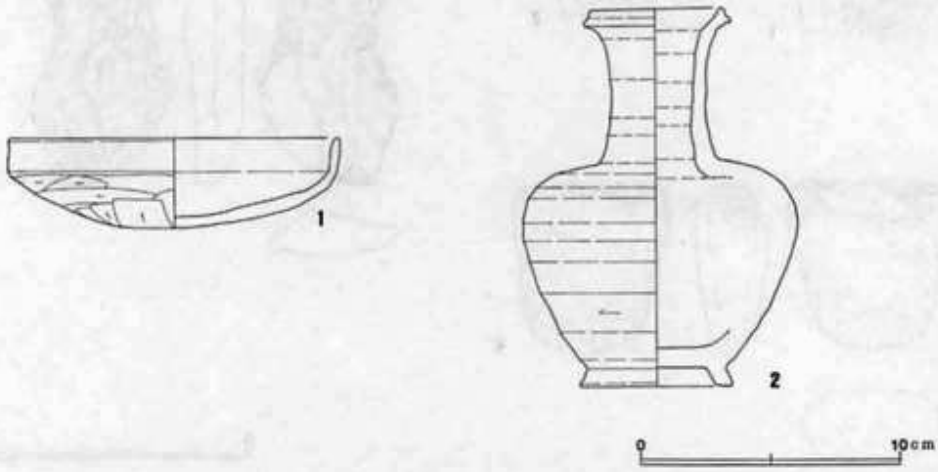
今回報告する2調査では、遺構は検出されなかったが、縄文時代前・中期の土器片と石器が小数出土している。第12次調査出土の土器（第11図1～12）は、胎土に繊維を含むもので、黒浜式に比定できよう。当該期の土器は、本遺跡に近接する字尻遺跡でも表採されている（久保田他　1983）が、平成3年度に実施した発掘調査においても同時期の遺構は検出されていない。ただし、平成3年の城ノ越遺跡第8次調査では、2ヵ所の陥穴が崖線に沿って検出されている（未報告）。本遺跡の周辺には、字尻遺跡を始め、宮原遺跡、谷をはさんで丸山遺跡などの縄文時代を主体とする集落遺跡が濃密に分布する。本遺跡は、こういった集落構成員の活動の場と看做すことができよう。また、同調査で出土した磨製石斧未製品（第11図13）は、生活遺構が検出されていない現在、石器製作を行う場の在り方を考える上で興味深い資料と言えよう。

城ノ越遺跡第9次調査出土遺物について

城ノ越遺跡第9次調査については既に報告済みである（石塚　1997）が、報告者のミスから遺物の一部に掲載洩れがあった。ここに提示し、謝意を表す次第である。

第20図1は土師器坏である。第16号住居跡の竈覆土上層から出土した。口径12.8cm、器高3.5cmを測る。残存率100%。焼成良好で、褐色、暗褐色を呈する。口縁部には、横ナデ、体部中位以下にはヘラ削りが施されている。内面にはタール状のものが付着している。8世紀中頃のものと考えられ、他の出土遺物と時期差は認められない。

2は、小形の長頸壺でほぼ完形。第9次調査区内で採集されたものであり、耕作時に出土し放置されていたものである。口径5.1cm、底径5.9cm、器高14.9cmを測る。体部は器厚厚く、かなりの重



第20図　城ノ越遺跡第9次調査出土遺物

量がある。胎土には白色粒子と石英を含み、焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。東金子産。第16号住居跡出土遺物とは時期差がみられるため、近接して他の住居跡が存在する可能性がある。

検出遺構の時期と問題点

今回報告した3軒の住居跡は、出土遺物の検討から城ノ越12次第19号住居跡が8世紀後半～9世紀初頭、宮ノ越8次第67号住居跡と城ノ越13次第20号住居跡が9世紀中頃～後半に比定できると考えられる。出土須恵器の産地は、東金子窯跡群の主要消費地に当るため同窯群産が圧倒的であるが、南比企産のものも比較的新しい城ノ越第20号住居跡で散見され、周辺集落遺跡の量比分析と同様の傾向が認められる（入間地区文化財担当者部会　1995）。

注目すべき遺物として、城ノ越第20号住居跡から出土した鉄鉢（第18図16）と凸帯付四耳壺（第18図17）がある。前者は寺院関連遺跡からの出土が顕著であるが、本遺跡周辺で同種遺跡は知られていない。ただし、滑川町柳沢A遺跡では丘陵肩部から4面庇の2×3間の掘立柱建物跡が検出されており、周辺集落跡の住居跡からは鉄鉢が出土している（植木他　1997）。検出位置と掘立柱建物跡の様相から、集落群内の小規模な「御堂」のようなものと考えられ、信仰の一形態が想定される。城ノ越遺跡周辺も集落群規模から考えて、同種遺構の存在の可能性を指摘しておきたい。後者は東金子窯跡群八坂前窯跡（坂詰他　1984）灰原出土遺物が知られており、9世紀中頃から後半において同窯跡等で小数生産されたものとされている（江口　1997）。同器種は、狭山市鳥ノ上遺跡、今宿遺跡でも出土しており、希少生産品の供給の在り方が興味を引くところである。

以上、今回報告の成果を概略的にまとめたが、既に詳細な報告がなされている宮ノ越遺跡と比較して、同一集落と考えられる城ノ越遺跡の分析は端緒についたところであり、現在までに行われた調査の総合的な成果を明確にするには、両遺跡の比較はもとより、小山ノ上遺跡、今宿遺跡をも含めたより高次の「遺跡群」としての分析が急務となろう。その過程にあって、高麗郡建郡との関連、東山道武蔵路のルートの検討等の議論が有機的に結びついてくるものと考えられる。

引用・参考文献

石塚和則　1997『狭山市埋蔵文化財調査報告書11 城ノ越遺跡一第9～10次調査一』狭山市文化財報告第20集 狭山市教育委員会

入間川地区文化財担当者部会　1995『入間郡における須恵器産地推定について』

植木智子他　1997『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会

江口　桂　1997「律令制変質期の須恵器の系譜」『東国の須恵器』古代生産史研究会

金子直行他　1996『八木上他』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第165集

久保田福造他1983『狭山市遺跡分布調査報告書 第2集』狭山市史編纂係

栗岡　潤他　1995『西久保他』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第156集

小渕良樹他　1983『狭山市埋蔵文化財調査報告書　笹井古墳群他』狭山市文化財報告Ⅷ　狭山市教育委員会

小渕良樹他　1987『狭山市埋蔵文化財調査報告書5　今宿遺跡』狭山市文化財報告12　狭山市教育委員会

駒見和夫他　1982『宮の越遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第44集 埼玉県遺跡調査会

坂詰秀一他　1984『八坂前窯跡』八坂前窯跡調査会・入間市教育委員会

仲山英樹他　1985『狭山市埋蔵文化財調査報告書 城ノ越遺跡2次・3次』狭山市文化財報告X 狭山市教育委員会

《附　編》

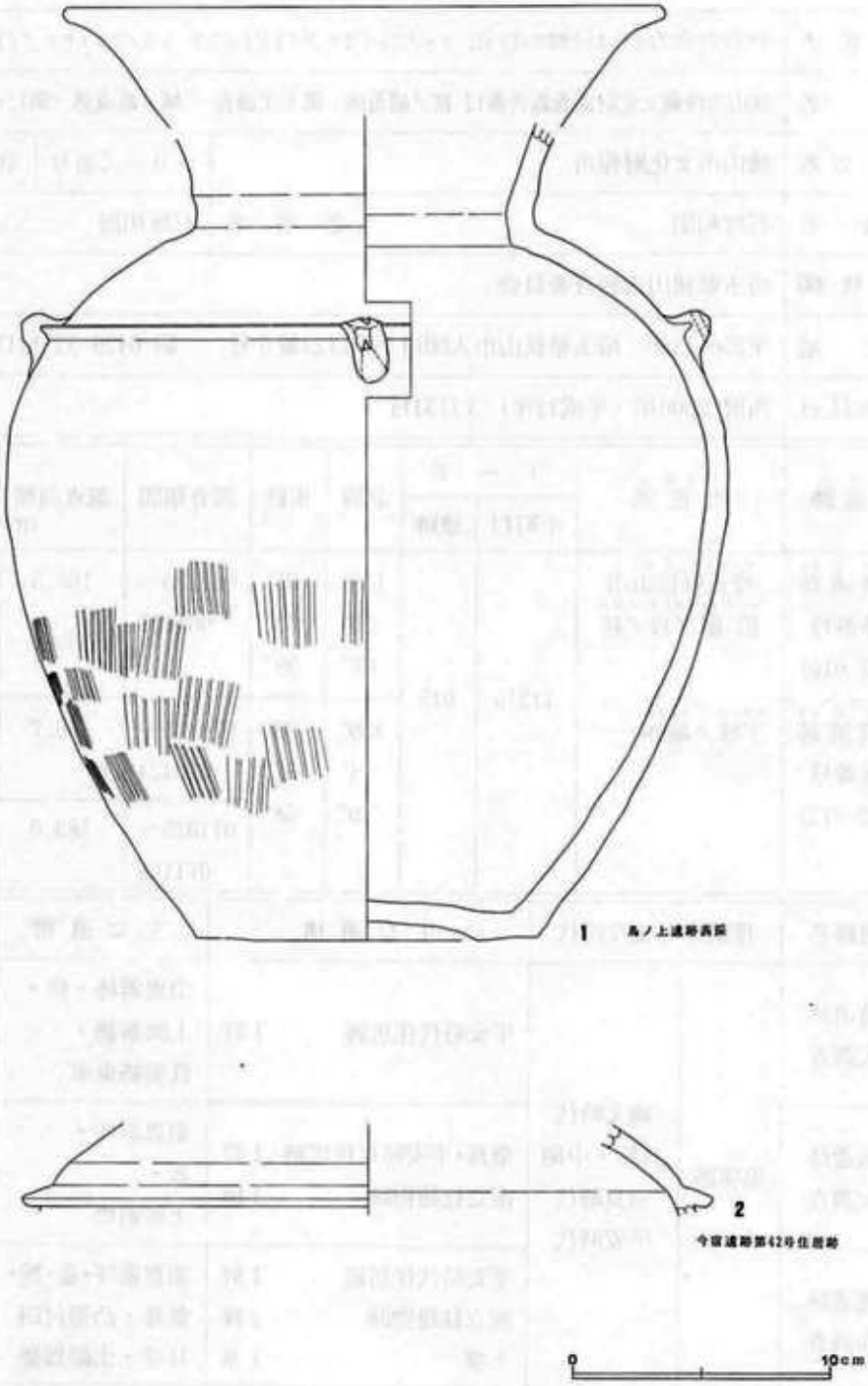
市内遺跡出土凸帯付四耳壺について（第21・22図）

今回報告した城ノ越13次第20号住居跡からは、破片ながら東金子窯跡群の希少生産品と思われる凸帯付四耳壺が出土している(第18図17)。本教育委員会では、以前市内在住の山崎稔氏により鳥ノ上遺跡内で表採された同器種が寄贈され、復元保管されていた。また過去の報告書を当った結果、今宿遺跡でも同種遺物が出土していることが分かったため、再実測し紹介することとした。

第22図１は鳥ノ上遺跡で表採されたもので、約40%が残存する。現高32.1cm、底径13.8cmを測る。特徴的な凸帯は角の立つタイプで、薄い。「耳」は３ヵ所残存し、孔の貫通するもの１ヵ所、貫通しないものが２ヵ所である。肩部には降灰がかかっている。体部には叩き目が施されているが、不鮮明である。第20号住居跡のものと酷似する。２は今宿遺跡第42号住居跡出土遺物であるが、共伴遺物から考えて、調査時に重複する第41号住居跡の遺物が混入したものと思われる。凸帯部径は推定で27.6cmを測る。凸帯は、１とは異なり、作りが厚く外側にやや垂れ下がるように付けられている。「耳」は残っていない。肩部には降灰が顕著である。

両者と第20号住居跡出土遺物を比較すると、凸帯の作りに明確な差異が認められる。現在のところ類例が少ないため、これが時期差なのか、技法のバリエーションなのかは不明である。今後も類例の収集に努めたい。なお、本遺物は狭山市文化財センターで保管している。

第21図　凸帯付四耳壺表採地点



第22図　市内遺跡出土凸帯付四耳壺

報告書抄録

フリガナ	サヤマシマイゾウブンカザイチョウサホウコクショ12 ミヤノコシイセキ ダイ8ジチョウサ シロノコシイセキ ダイ12・13ジチョウサ		
書名	狭山市埋蔵文化財調査報告書12 宮ノ越遺跡―第8次調査― 城ノ越遺跡―第12・13次調査―		
シリーズ名	狭山市文化財報告	シリーズ番号	第21集
編者名	石塚和則	著者名	石塚和則
編集機関	埼玉県狭山市教育委員会		
所在地	〒350-1380 埼玉県狭山市入間川1丁目23番5号 Tel 0429-53-1111		
発行年月日	西暦 2000年（平成12年）3月31日		

所収遺跡（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
宮ノ越遺跡（ミヤノコシイセキ）（県遺跡番号22-016）	埼玉県狭山市（サイタマケン サヤマシ）柏原字宮ノ越（カシワバラアザミヤノコシ）	11215	015	139° 25′ 02″	35° 53′ 09″	061220～061227	166.5	個人住宅
城ノ越遺跡（シロノコシイセキ）（県遺跡番号22-013）	字城ノ越外（アザシロノコシホカ）			139° 24′ 49″	35° 52′ 58″	070411～070424	66.7	道路整備
						071025～071108	183.0	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ越遺跡 第8次調査	集落跡	縄文時代 前期・中期 奈良時代 平安時代	平安時代住居跡 1軒	須恵器坏・甕・土師器甕・鉄製紡垂車	
城ノ越遺跡 第12次調査			奈良・平安時代住居跡 1軒 掘立柱建物跡 1棟	須恵器坏・蓋・土師器甕	
城ノ越遺跡 第13次調査			平安時代住居跡 1軒 掘立柱建物跡 2棟 土壙 1基	須恵器坏・蓋・椀・鉄鉢・凸帯付四耳壺・土師器甕	

宮ノ越遺跡第67号住居跡全景

第67号住跡遺物出土状況

図版－2

第4図1

第4図2

第4図5

第4図9

第5図11

第5図13

第67号住居跡出土遺物

城ノ越遺跡第12次調査風景

第19号住居跡全景

図版－4

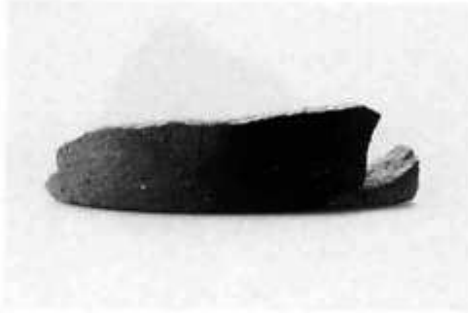
第19号住居跡遺物出土状況

第９号掘立柱建物跡全景

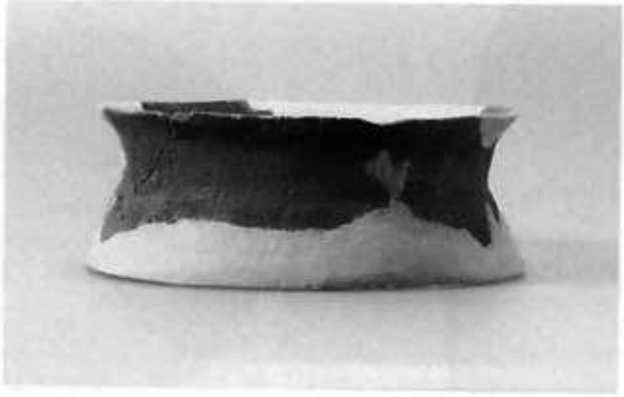
第10図 2

第10図 3

第10図 7



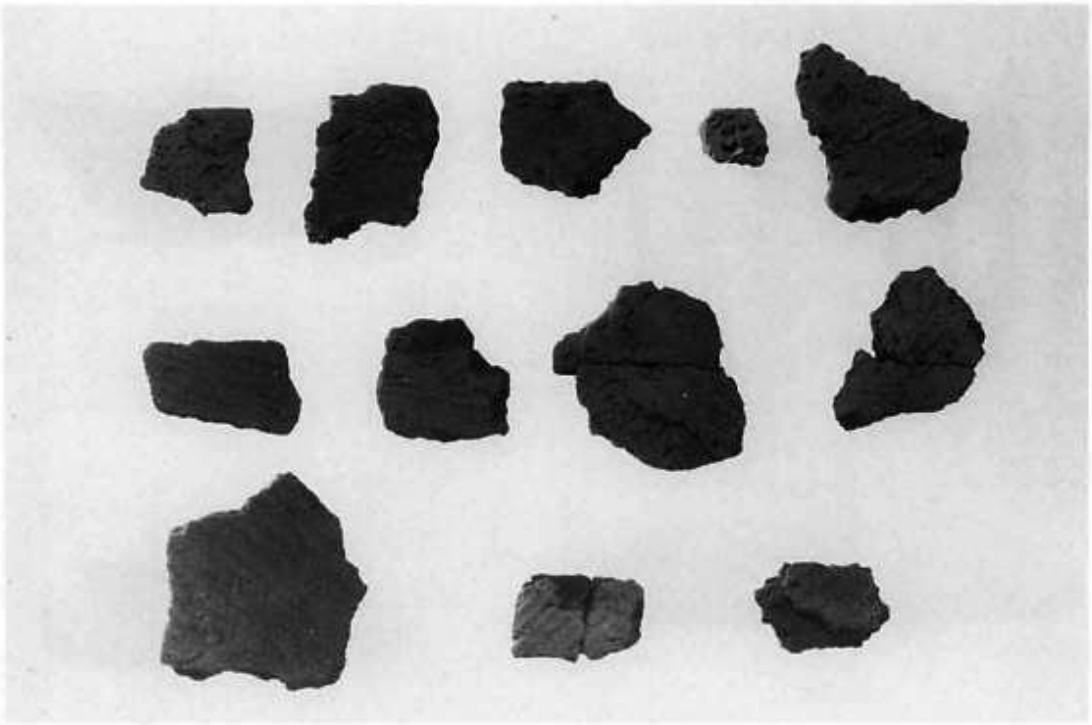
第10図10



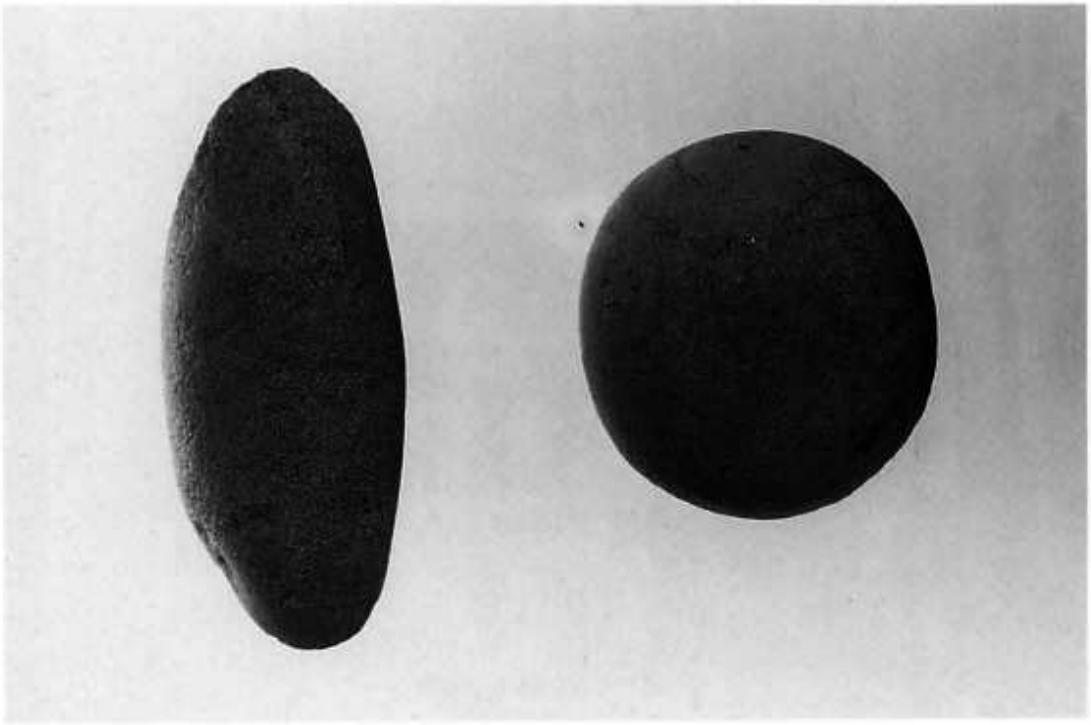
第10図11

第19号住居跡出土遺物

図版－6

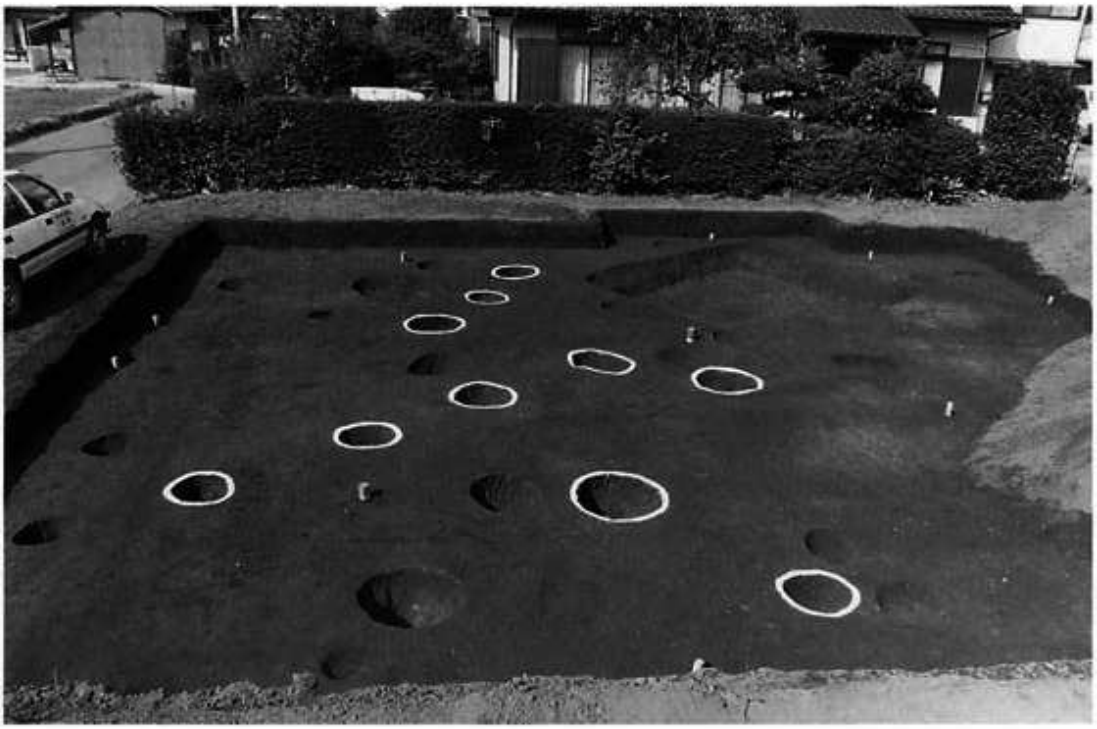


第11図1～12



第11図13・14

城ノ越遺跡第12次調査表採遺物



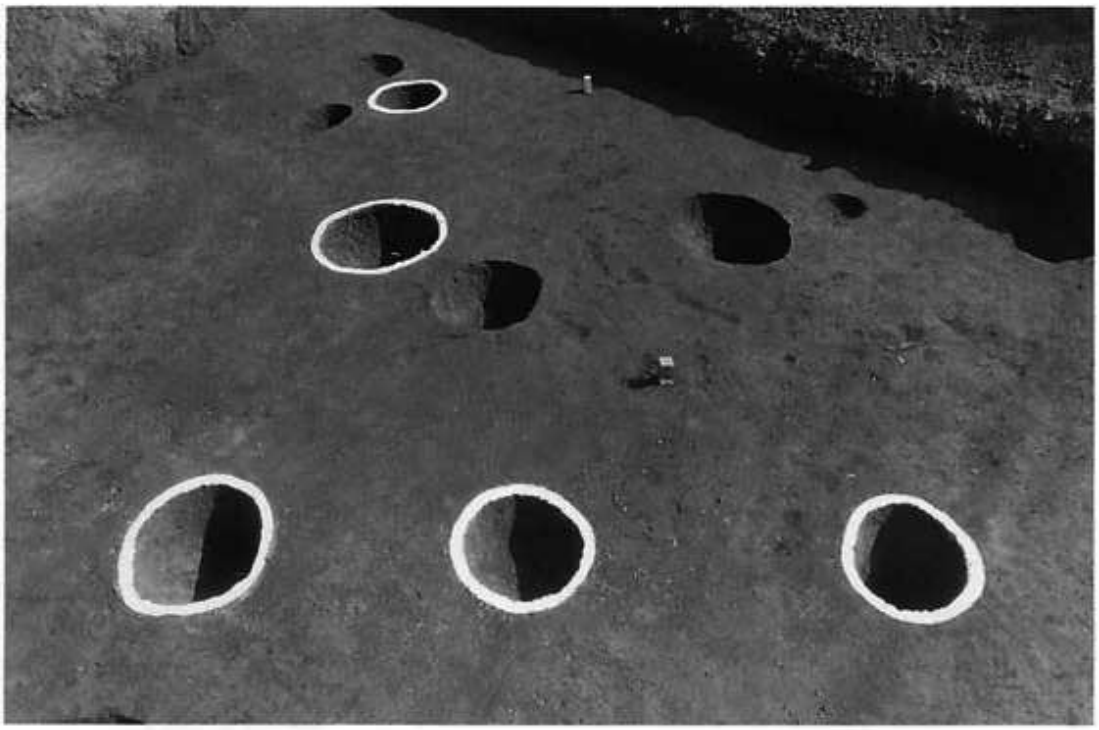
城ノ越遺跡第13次調査区全景

第20号住居跡調査風景

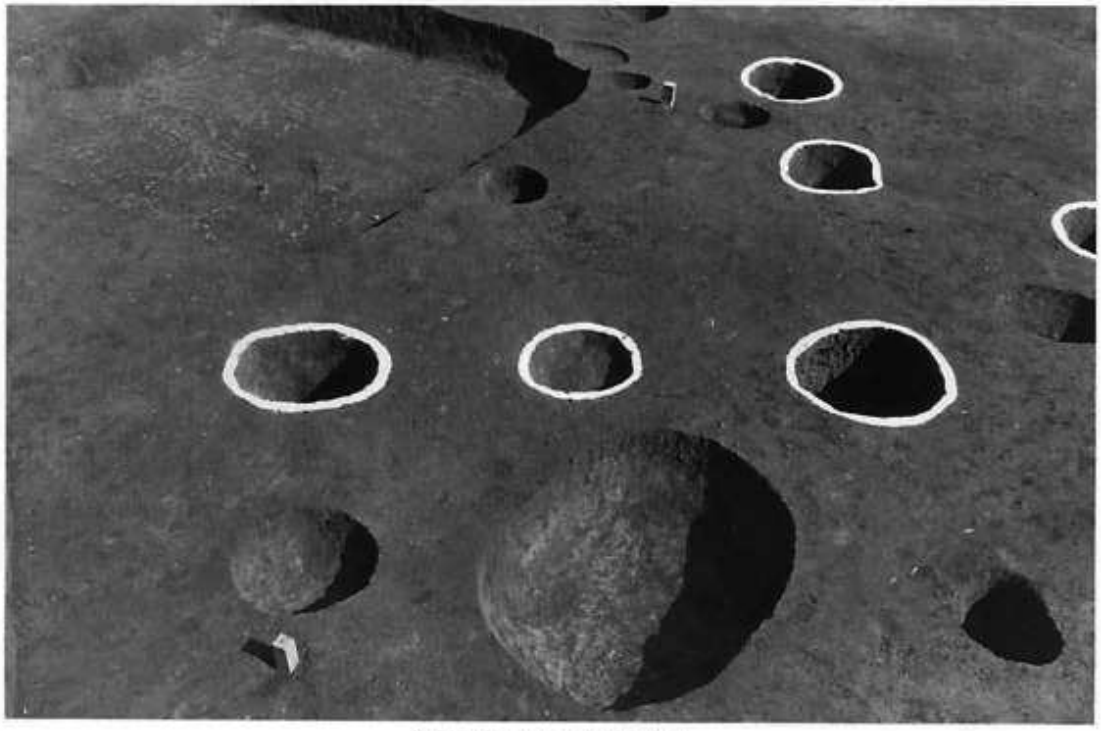
図版－8

第20号住居跡全景

第20号住居跡遺物出土状況

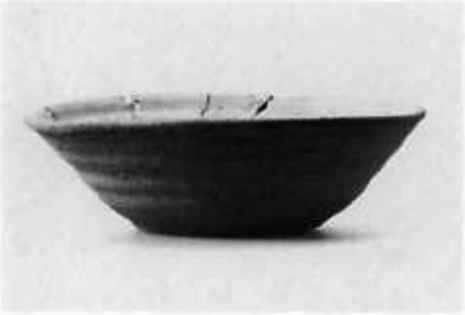


第10号掘立柱建物跡全景

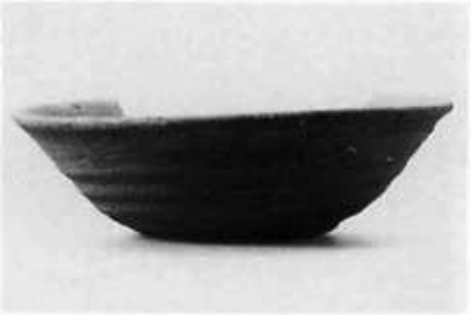


第11号掘立柱建物跡全景

図版—10



第17図 1



第17図 2

第17図 3

第17図 4

第17図 5

第17図 6

第20号住居跡出土遺物(1)

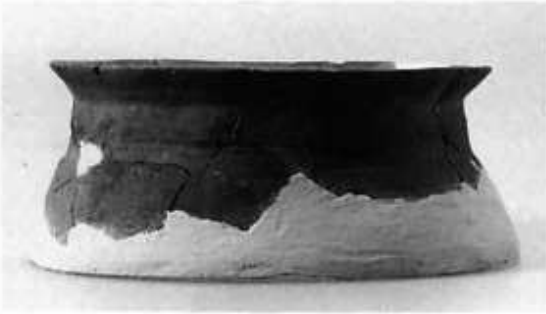
第17図 7

第17図 9

第17図12

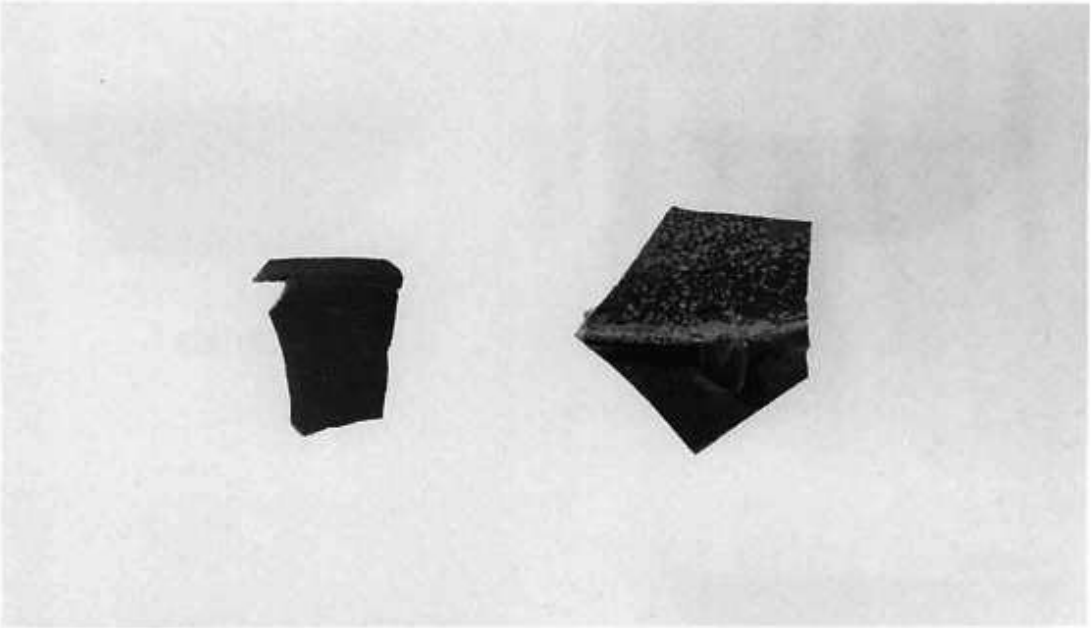
第18図14

第18図18



第18図19

第20号住居跡出土遺物(2)



第18図16・17

第20号住居跡出土遺物(3)

第20図 1

第20図 2

城ノ越遺跡第 9 次調査出土遺物

第22図 1

鳥ノ上遺跡表採遺物

平成12年３月21日　印刷
平成12年３月31日　発行

狭山市文化財報告　第21集
狭山市埋蔵文化財調査報告書12
宮ノ越遺跡 ―第８次調査―
城ノ越遺跡 ―第12・13次調査―
個人住宅・道路整備に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

発　行　狭山市教育委員会
狭山市入間川１－23－５
電話　0429（53）1111

印　刷　望月印刷株式会社
与野市円阿弥５－８－36
電話　048（840）2111

【正誤表】

宮ノ越遺跡第8次調査/城ノ越遺跡第12・13次調査報告書
（狭山市文化財報告　第21集）

ページ	行	誤	正
2ページ	組織表 右13行目	増島	増嶋
3ページ	20行目	開折	開析
5ページ	11 上広瀬上ノ原遺跡	22005	22007
	48 上中原遺跡	22025	22039
	49 中原遺跡	22025	22038
9ページ	3行目	椀	埦
11ページ	2行目	高台椀	高台椀
	遺物観察表 №7	椀	埦
		高台椀	高台椀
	遺物観察表 №8	椀	埦
		高台椀	高台椀
18ページ	11行目	無台椀	無台埦
	遺物観察表 №8	椀	埦
		高台椀	高台椀
23ページ	13行目	椀	埦
	3 出土遺物 2行目	椀	埦
	3 出土遺物 5行目	椀	埦
29ページ	遺物観察表 №11	椀	埦
	遺物観察表 №12	椀	埦
	遺物観察表 №13	椀	埦
32ページ	4行目	山崎稔氏	山﨑稔氏
報告書抄録	宮ノ越遺跡　北緯	139°25'02"	35°53'09"
	宮ノ越遺跡　東経	35°53'09"	139°25'02"
	城ノ越遺跡　北緯	139°24'49"	35°52'58"
	城ノ越遺跡　東経	35°52'58"	139°24'49"
	城ノ越第13次 主な遺物	椀	埦